
真・都市伝説の不死身さん

まちがい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・都市伝説の不死身さん

【NNコード】

N3450W

【作者名】

まちがい

【あらすじ】

都市伝説が牙をむく。原因は未知の物質か人の性か。
巻き込まれる不死身のお話。

ト男（前書き）

この作品は文芸社に送った作品です。ここに書いた最初の作品に手
に入れただけですが・・・
結果は自費出版になるが本にしましょうとのこと。・・・自費つて
(・_・^・)

月の光が雲に遮られ、街灯の灯り無しには歩けないほど暗闇。道路を挟んだ向こう側の堤防が高い壁のように感じられる。昼間の残滓のむわっとした空気がアスファルトから昇っている。

一息吸えば、熱せられた空気が肺に入り、疲労を増加させる。近くに川がないので力エルの鳴き声は聞こえないが、聞こえてくる波の音や虫の声が十分に夏を感じさせる。逆にいえばその音が聞こえるくらいの静寂が夜を覆っている。

ただ、新田佐代子にとつては単に蒸し暑い夜にしか感じられなかつた。

佐代子はクタクタのスーツを纏い、肩で切りそろえた茶色の髪を、苛立つた様子でくしゃくしゃにしながら夜の街を歩く。

佐代子が歩いてきた道沿いには、3階建てのビルの最上階に線路が刺さつていて、駅だ。

真ん中に駅名が記入されているだけの簡単な外装。駅を除けば中にはコンビニと切符売り場、駅員が出入りする従業員用の施設のみ。お土産屋やスーパーなども入っていない。まさに電車に乗るためにだけの施設だ。このような造りになつたのには理由がある。

佐代子が暮らしているここはいわゆるベッドタウンと呼ばれる所。しかし、一般的のベッドタウンとは違うところがある。それは規模だ。佐代子が住んでいるのは本州から少し離れた埋立地。

様々な技術の進歩により娯楽の種類は増えていった。ゲームセンターやボーリング、二十四時間のマンガ喫茶などがどんどん建設された。またそれを企画する会社もおのずと増えていくため、実際の生活空間は圧迫される形になつた。

国も経済の成長にこの第三種産業が発展することを願つて、日本の殆どは会社と娯楽施設によつて土地を埋めている。

そこで政府は日本の面積の拡大に乗り出した。諸外国との交渉により、一定の地域にのみ日本の拡大を許した。

そして海を埋め立て、寝て起きるためだけの島が出来たのである。佐代子が住んでいる島は本島と橋で繋がっている。距離は五キロ程。上の道路は車やバイクが移動し、その下の線路を電車が走る。更にその下にはチユーブのお化けのように見えるもので囲まれた動く歩道があり、歩行や自転車でも本島に渡ることができる。どちらも無料なので歩道を使う人は少ない。

佐代子はついついその電車の終電で帰ってきたのだ。

自分が必死になつて働いている間に世の中はもっぱら夏休みの話題でいっぱいである。

夏休みになると、本島は毎日お祭り騒ぎになる。そうなると必然的に電車も混む。そして佐代子が勤めている会社も若者をターゲットにしたゲームセンターの運営を行なつてるので仕事も増える。電車の混み具合も仕事の量も比例して膨れるというのだからたまらない。考えただけでも疲るので、佐代子は考えることを放棄し、ただグッタリと背中を曲げ、ポツポツと立つている街灯の灯りをぐぐる。

周りに見えるのはベッドタウンと言われるだけのことがあると関心するほどのマンション群。それも階層が高いものばかりだ。まだ出来て新しいこの島は住む人の目を楽しませるために色々工夫をしている。

今佐代子が歩いている道は全てレンガ敷きになつていて、水捌けも意外と良く、雨の日に水溜まりを見たことはない。

街路樹も変わつており、普通に木や草を植えているものから、熊やイルカの形をしたものも所々で見かける。逆に考えればここまでしないとこの島での生活はつまらないということだ。

ここに来たばかりの頃は夜中に変な街路樹を見て驚かされたことが何回もあつたが、今となつては見飽きたものだ。

風もない深夜の道を歩く彼女は自分の髪を額の汗ごと手でかきあげる。連日の激務で疲れた体には持ちなれた手提げ鞄もズシッと重みを主張してくる。投げ捨てたくなる衝動を堪え、黙々と帰路を急ぐ。駅から歩いて十五分。ようやく彼女のマンションが見えてくる。

オルウェール美園。それが彼女のマンションだ。地上十一階。地下は駐車場になつていて。全体的にクリーム色をした長方形のマンションだ。窓の明かりがポツポツと見えるが大体の住人はもう寝ている。彼女にとつてはいつもの光景だ。

自宅マンションに入り、すぐ目の前にエレベーターが横並びに二台ある。向かつて右側が上りで左が下りとなつていて。エントランスと言つほど豪華な造りではないが天井には無駄に大きなシャンデリアが暖かな光を注いでいる。エレベーターに乗る前にまずは手紙などを来ていいなかポストをチェックするものだが、このマンション、ポストにひと工夫あり、部屋番号のポストに手紙などの配達物を入れると自動的に部屋のほうへ届けてくれる。まるで長い掃除機みたいだと彼女は思う。

彼女の部屋は最上階の十一階。右側のエレベーターのボタンを押し、降りてくるのを待つ。

今日は散々だつた。夏休みに向けての最終調整中にトラブルが起き、その始末を自分に押し付けたあのズラ係長。おかげで終電ギリギリまで仕事が長引いてしまつた。

(いつかそのズラを丸めた新聞紙で吹き飛ばしてやる)

と心で毒づく。

ローンとエレベーターの到着音がシーンとした空間に響く。扉が開き、足を引きするように乗り込んだ。疲労困憊の彼女にはもう足を上げることさえ疎ましくなつていて。

上昇するエレベーター。その微かに感じる重力の重みと駆動音はなぜか心を不安にさせる。狭い空間はそれだけで逃げ場がない。部屋

の階に近づくに連れて安心するのだが、その分、別の世界に近づいている感じも受ける。そんなものあるはずもない妄想だと分かつてはいるのだが、エレベーターといつ長時間いのいとのない特別な空間はそんな心の弱い部分を浮き彫りにさせれる。ポンと、お決まりの到着音が鳴った。

(別に閉所恐怖症じゃないんだけどね)

何故かホツと安心する自分に苦笑する。

扉が開き、少し急ぎ気味でエレベーターから降りる。

部屋は一階に六部屋ずつある。佐代子の部屋は廊下の突き当たり。角部屋である。そこからの景色はとても遠くまで望めるのだが、生憎深夜では各階の部屋の電気がほとんど消えているため、道路の街灯以外に光はない。ベッドタウンならではの景色である。廊下にもライトは付いているが、オレンジの光は廊下を朝とは別の顔に変える。

陽があるついにはなんともないのだが、夜に廊下を歩くと、別の世界に連れて行かれるのではないかと錯覚させられる。更に十一階という高さは空気も変化させる。今までの暑い空気からひんやりとした空気に変わり、場の雰囲気が一変する。もう波の音や虫の鳴き声も聞こえない。完全な静寂は佐代子の孤独感を一層強くする。

だが、たかが十五メートルの距離。どうといつことないと自分に言い聞かせるように呟き、歩き出す。

「ツ・・・ツ・・・ツ・・・ツ・・・

廊下に響くのは、自分の乾いたヒールの足音だけ。冷たい空気が体を舐めるように流れいくのを敏感になつた肌が感じる。

「ツ・・・ツ・・・ツ・・・ツ・・・

反響する靴音はまるで自分の後ろを誰かがピッタリと付いているように感じる。自分の心臓の音でさえ、まるで自分の音ではない様だ。

ノシ・・・ノシ・・・ノシ・・・ノシ・・・

後少しでエアに手が届く。安堵と焦りが最高に高まる。そうなるともう辛抱できない。

ない。今も背中には誰かがくつつくぐらいの距離で立つていのうつな想像が舞めく。急いで開けようと鍵を回すが

「・・・？あれ？」

鍵からは解錠した感覚がこない。鍵を閉め忘れてしまったのかと考えたが、毎朝念入りに確認をするようにしているので、そんなことはないはずだ。

不思議に思いながらも何かの勘違いと結論つけ、部屋に上がりうつて、ドアを少し開けたとき、微かに部屋からなにか聞こえてくる。

ペタ・・・ペタ・・・

ドアの向こうから、じつに近づいてくる足音が聞こえてきた。それは裸足でフローリングの廊下を歩いている音。

ペタ・・・・ペタ・・・

締めたはずの鍵が開いていて、そして誰もいないはずの部屋からの足音。

ペタ・・・ペタ・・・

その足音は段々と大きくなつてきていた。いつの間にか佐代子は、手に嫌な汗をかいていた。

空気がおかしい。今まで普通に感じていた空気がピンと張り詰め、息苦しい。

泥棒なのか、それとも自分が今まで想像してきた別の「ナニカ」なのか。しかし泥棒なのだとしたら急いで警察に電話しなければならない。「しかし」「けれども」が頭の中をグルグル周り、考えているようで何も考えていない状態が続く。

ペタ・・・ペタ・・・

思考を放棄しても現状は何も変わらない。体は震え、少しの音でも気付かれる様な気がして、呼吸も浅くなつていて。耳に聞こえてくるのは足音と自分の心臓の音だけ。もはや廊下のライトの明るさは感じない。真っ暗闇の中で自分とドアだけが存在している様だ。

ペタ・・・ペタ

「・・・・・・・・

足音が止まつた。つまり今、ドアを挟んで向かい合つているということだ。

呼吸がだんだん荒くなつてくる。口だけの呼吸は肺に十分な酸素を送れていない。頭もクラクラしている。足は立つている感覚がない。体中が総毛立つていて。痛いほどの静寂が氣を狂わせる。目は瞬きもせず、ジッとドアを見つめたまま動けない。頭の中はすでに白紙。

・・・ボコン

扉が開き、部屋に空気が入ることで起きるドアの軋む音が木靈する。頭は何も考えていないので、視覚の情報は鮮明に脳に焼き付く。ドアの隙間から覗くモノは・・・

「おかえりー。遅かったね？姉さん」

白のタンクトップに青のジーパンを履いたラフな格好をしている、妹の美代子だった。

「・・・」

「ゴツンと美代子の頭にゲンゴツを落とす。

「いつたーいー何するのよー」

「痛いじゃないわよー来るなら来るつて連絡入れなさいー驚くじゃないの・・・」

「ごめんなさい」と謝る妹を見て、足音の正体が分かり、安堵の息をはぐ。

「まあ外も暑いし疲れてるみたいだから、早くあがりなよ

「あんたが言わないの」

妹に苦笑しながらも、促されるままに家に入ることにした。

下男（後書き）

まだまだ続きます。最初の不死身さんと比べると結構変わっています。
暇つぶしにいかがでしょうか？

ト黙2（前書き）

続きです。

佐代子の部屋は一般的なLDKタイプだ。玄関から短い廊下を歩き、T字路を曲がった先の突き当たりに、洗濯機が置いてある。そこから向かつて左がお風呂場、右がトイレになつてている。曲がり角から洗濯機の前の籠に洗濯ものがうず高く積まれていているのが見える。

(・・・まあ明日でいいか)

先延ばしにすることとどりあえずの安寧を得る。

通路の左側には小さい台所がある。とても綺麗に片付いて見えるが、実のところ、全然使っていないだけ。食事はもっぱらインスタントだ。調理道具は手鍋と電子レンジだけ。あとは調味料のみ。料理には何回か挑戦した。しかし残飯しかできない不思議。その難問に挫折した記憶は心の金庫に入れ、海に沈めた。

廊下を突き当りまで進むとリビング兼ベッドルームだ。

部屋に入るなり、涼しい空気が火照った体を冷やす。

部屋に入つて正面に大きな窓がある。十一階という高さもあって、眺めは中々だ。いろんな形のマンションがところ狭しと建つているのが見える。見慣れたもので清新しさはなにも感じない光景だが、ここに自分と同じ境遇でがんばっている人がいると思うと少し、感慨深いものを感じる。

窓に向かつて右側には一十七インチのテレビが置いてある。その横に並んで、大きな木製のタンス。

窓の向かい側には大きなベッドが置いてある。せめて寝るときは快適に！という志のもと、引っ越し際に奮発したダブルベッドだ。周囲にはいろんな種類のぬいぐるみが置いてある。

部屋の真ん中には座布団代わりのピンクのクッションと黒い机がひとつ置いてある。汚れも目立たず座つたらちょうどいい高さで結

構気に入っている。机の上にはノートパソコンが一台だけ。窓を向いて左には小さな化粧台が置いてある。三面鏡の少し古いものだ。壁も白一色で全体的に見てベッド以外は年頃の女性の部屋とは思えないほどシンプルな内装になっている。

佐代子は手に持っているカバンをベッドに立て掛けるようにして置く。そして飛び込むようにしてベッドに寝転がり一息つく。

「はあ、疲れたあ」

妹のせいで怖い思いをしたが、家に帰ったことで緊張の糸が緩んだ。体に蓄積された疲労が思い出したかのように襲いかかってくる。美代子はそんな姉を見て一言

「なんかおばさん臭いよ、姉さん」

余計なお世話だと佐代子は思つ。

「誰のせいだと思つてゐるの。緊張しすぎて心臓が破裂するかと思つたじゃない」

あの時の恐怖を思い出すだけで言ひようのない感覚に囚われる。実際、とても怖く心細かった。あんな体験は一度どごめんだと強く思つ。

落ち着いたところで佐代子は美代子に疑問を投げかける。

「あなたどうして私の家にいるの？」

美代子が来るという連絡は受けていない。鍵は合鍵を実家に置いてあるので問題ないがここに来た理由が気になつた。

「だつて夏休みだもん。一度は姉さんの家に行つてみたかったんだよねー。姉さん実家に殆ど帰つて来なかつたから、顔も見たかつたし?」

あどけない笑みで、美代子は答えた。

妹は地元の中学二年生。まだ子供っぽいところが残つているがなかなかに美人だと佐代子は思つてゐる。羨妬目かもしけないが、実際のところ、交際の誘いは多くあつたらしい。

姉とは対照的な黒のロングヘアはサラサラしていて、つい撫でてしまつ。それをくすぐつたそうにする妹を見て、今日の疲れは殆ど無くなつた。

美代子はベッドの周りを見て

「なんかぬいぐるみ多いね?姉さんってぬいぐるみ好きだつけ?」

と近くの二つのぬいぐるみを拾い上げながら言つ。

「もうこれがないと眠れなくてね」

子供っぽいかなと聞くと、うつると美代子は首を左右に振る。

この子は昔から姉の言うことに逆らうことはなかつた。ケンカをしてもいつも美代子が先に折れてくれた。親に叱られた時は慰めてくれた。年は結構離れているのにもかかへらず、美代子のほうがお姉さんの様だ。いつかは美代子に頼られる姉にならうと、今まで努力してきたのだが、まだまだ修行が足りないらしい。

お互ひの近況を話し合つていたさなか、グゥーという音が鳴つた。テレビも付けていなかつたので部屋中に響いた。

「おねえちゃん」

甘えた声で美代子がお腹をさすりながら言つ。時刻は午前一時。美代子がいつから部屋に居たのかは知らないが普通は寝ている時間帯。外を見ると漆黒の闇が広がっている。どうやら向かいのマンションの住人全てが眠りについたみたいだ。お腹が空いて当然かと佐代子は思う。

考えてみたら自分も何も食べてない。久しぶりに会つた可愛い妹の突然の訪問に興奮していて、食欲が頭から飛んでいたみたいだ。ベッドから体を起こした佐代子は、伸びをしてから立ち上がる。

「ふふっ、わかつたわかつた。何か食べようか。今日はカツブランメンしかないけど、明日は仕事が休みだから、何か美味しい物でも食べに行こつか」

やつたーと美沙子は両手を上げて喜びを表す。そんなに喜んでもらえるとこちらも嬉しくなる。連日の疲れを吹き飛ばしてくれる美代子の存在は佐代子にとってかけがえのないものだと改めて実感する。

美代子の動作に苦笑しながら佐代子はキッチンに向かつて歩き出す。うちにある唯一の調理器具の鍋を取り出し水を入れ、一口コンロのスイッチを入れる。今は電気ですぐお湯が沸くものがあるらしいが佐代子の家はない。むしろ鍋の方がお湯も沸かせるし、袋のラーメンも作れるのでこっちの方が便利だと考える。

お湯を沸かしている間に美代子が何をしているのかと思い、部屋を覗いて見ると、立ち上がり窓の方へと移動している。外が暗い為、窓は鏡のように部屋を映し出している。そのせいで外が見えないのか美代子は体を前後左右に動かしてなんとか外を見ようとしている。

そんな光景を見て微笑ましく思つてゐるうちに鍋の水が沸いたようだ。コンロの下の棚からいくつかのカップ麺を取り出す。ラーメン、うどん、ソバ等、美代子に好きなものを選んでもらおうと四つづつ

ほど持ち、部屋に戻る。

「美代子。どれにす・・・」

廊下が部屋へと変わった境目にかかりたとき、
部屋の中の光景がまるでテレビから別の世界を覗いているかのよう
に感じた。

窓に背中をあずけ、足を投げ出すよつて座っている美代子が赤く
染まっていた。

下男2（後書き）

次から本番かな。

ト黙3（前書き）

1911年でが最初の事件。

壁、床、机、ベッドと、その殆どが赤く染色されている。動かない美代子の喉から今もなお、ドロリとした液体を撒き散らしている。ピクリとも動かない美代子は、頭を垂れていて顔が見えない。それが一番佐代子の心を揺さぶった。

佐代子は、まだ美代子が生きているかもしないという、淡い期待を抱いていた。

実はこれが美代子の悪戯で、佐代子を驚かせようとしているのだ。この光景を見て、そんなことを思うのはオカシイのだが・・・

冗談はやめてよねと口を開きかけ、ふと気付く。

髪からも赤い零がポタリ・ポタリと垂れている。零ができる速さからみて、相当濡れている。

血で。

白いタンクトップは赤を鮮やかに写し、青のジーパンは黒に近い色に変わっている。

何が起きているのかわからない。体が動かない。

目。

これだけが忙しく動きまわる。しかし焦点が合わない。視界はぼやけ、そこから情報を得ることが困難だからこそ、頭が働かない。だから体に命令がいかない。

負のスパイラルに陥る。

何もできない中で、只々、赤を生産する妹がいる空間を凝視することができなかつた。

・

時間が過ぎる。

どれだけ突つ立つていたのだろう。美代子の血が止まつた時、金縛りが解けたかのように体が動いた。

なんとか引きずる形で足を動かしていく。体が拒否している。今の

美代子に近づく事を。無理矢理動かした足は肉を引きむきるような痛みを発する。

手は未だにカップ麺を持ったまま、落とさないよう慎重に持っている。もはやこれが楽しかった時間の名残なのだ。これを落としてしまつたら、この状況を受け入れないといけない。カップ麺を持つている間はまだあの時間に戻れるような気がして。

心臓の音がやけに響く。今にも破裂しそうな痛みさえ感じる。足を引きずる音、カップ麺の擦れる音は全て佐代子に届かない。

美代子に近づくにつれ、息が荒くなつていいく。口で呼吸をするせいか、口の中は乾き、喉はカラカラだ。喉の肉が乾燥で張り付いて息ができず、ときどき咳がでる。それでも唾を飲み込むこともせず荒い呼吸を繰り返す。

部屋は冷房を入れているので暑くないはずなのに、汗は頬を伝い口に入つてきた。そこでようやく喉を潤すために唾を飲み込むことができた。

かなりの時間をかけて美代子の元にたどり着いた。約五、六歩の距離。しかし佐代子には百メートルほどの距離に感じた。

上から美代子を見るとまるで眠つているように見える。先程まで撫でていた頭。整つた綺麗な髪。美代子のチャームポイントのひとつだつたはず。

そこからさらに下。顔を見るためにしゃがむまでは覚悟が必要だつた。別に身内が死ぬことは初めてではない。可愛がってくれた母の両親。佐代子がまだ小学生の時だつたがとても悲しくて大泣きしていた記憶が呼び起こされる。両親に抱かれて慰めてもらつた。

しかし今は一人。さらに自分が一番可愛がつていた妹の死。それを受け止められるのか。想像しただけで心は軋みをあげる。

もしかしたらまだ生きているかも知れない。血は運良く首の肉が血管を圧迫して止血の役割をはたしたのではないか。と到底ありえないことを想像する。だが生きているかも知れないという考えがあるとないとでは行動力に大きな違いがでる。実際に佐代子はそこか

ら思い切つて美代子の顔をのぞき込んだ。

顔がなかつた。

「…………」

手に持つていたカツプ麺が落ちると同時に声にならない絶叫が発せられる。

目や鼻、口があるはずの顔面は何か鋭いもので何重にも抉られていた。目と耳があつた場所は空洞と化している。肉が傷口からはみ出で、頬からは白い骨が見える。そこから血がまだ滴つている。

腰が砕けた。赤い海に座り込み、べちゃっと音が鳴つた。床に広がっている血のヌルリとした感触に寒気が走るが、そんなことに構つていられない。

「…………」

吐き気が込み上げ、とつさに口を両手で覆う。生涯、見ることのない光景を今、自分の家で、自分の妹で見せられてい。

今すぐに目を閉じたい。しかし、自分の意思に反して目は美代子の体をしつかり見ている。

血が勢い良く出ていた箇所の喉。喉の幅半分が切り取られている。木を倒すときに最初に行つ切り方のような傷口。にこまでひどい傷を負つてているのに、体だけは見たところ、傷一つついていない。しかし人を殺すには十分すぎる。

ひどすぎると言佐代子は思つ。さつきまで楽しく話していたこの子が、なんでこんな酷い死に方をしているのか。

一瞬にして世界が変わつた。ピンと張り詰めた空気。視界に入るのは地獄。心は伽藍堂となり、朽ちるのをただ待つだけの体を必死になつて動かしている自分。

佐代子の世界は完全に破壊された。

だが、佐代子は動く。美代子を弔つてやらないといけない。

涙は不思議と出でこない。めまぐるしく変わる心が、泣くという感情を持つてくるのに時間がかかる。その間に出来ることをするべきだ。

部屋の入口の側には、固定電話が置いてある。そこに向かいながら、佐代子はすべきことを整理する。

「・・・まず救急車に連絡を入れて、そして警察に・・・」

足が止まる。

今更気づいた。

美代子は確実に誰かに殺された。自殺や事故で、こんな傷ができるはずがない。なら、

まだこの家に、犯人がいる可能性がある。

小夜子は右手で口を覆い、愕然とする。

なぜ、今まで気付かなかつたのか。妹の状況を見る限り、確実に相手は話を聞くタイプではない。ここにいたら一の舞だ。

部屋を出よう、と歩きだしたとき、足は妹の前で止まる。妹をここに置いていくのは心苦しい。しかし、今犯人がこの家にいる可能性は極めて高い。早々に離れなければ。

迷っている佐代子の耳に、音が聞こえた。

ズリ・・・ズリ・・・

妹の死体の反対。ベッドの方から、何かを引きずるような音が聞こえる。

ベッドの下には人がもぐり込めるだけの隙間がある。音の発信源

は多分そこだ。

落ち着き出した空気が再度緊張の糸を張り巡らす。

ズリ・・・ズリ・・・

それはとてもゆっくりとした動き。

その怠惰な動きは、佐代子の精神をグチャグチャにする。

ズリ・・・ズリ・・・

地震がきたのかと思つほど震えが起る。

(な・・・なに!?)

大きな物体が動く音。

聞こえる度に佐代子を襲う、

不安感。

孤独感。

部屋の光は付いている。光源は十分なはずなのに、目の前はとても薄暗い。今しがた起つていてることについての答えを、脳が求めてくる。

しかし後ろを振り向く勇気がでてこない。恐怖は、佐代子をがんじがらめにする。

ズリ・・・ズリ・・・

だが、同時に怒りも込み上げてくる。

最愛の妹を、後ろにいる何かが殺したのは明らか。ならせめて、一矢報いてやりたい。

心はまだ、死んではないらしい。佐代子は縫いつけられたよう

に動かない足を無理矢理床から剥がす。
勇気を出し、ベッドの方へと振り向く。

見るべきではなかつた。

逃げるべきだつた。

理解した時には、佐代子の首は胴体から離れていた。

下男3（後書き）

次から主人公の登場です。

下男4（前書き）

やつと主人公です。

夏。空には薄雲が覆つていて、そんなことはお構いなしに、太陽は熱で地面を熱い鉄板へと変える。

周りの人々は涼を求めて、忙しなく行き交う。風は吹いてはいるが、暑さを無視できるほどのものではなく、逆に暑さを増長させる。

日本は廃藩置県制度を取りやめ、関東、四国、東北、と呼び方を変える「州置制度」へと移行した。

主な理由として、日本は、完全に娯楽だけを極める遊国となつている。もちろんターゲットは日本人だけではなく、国外のだれもが、やつたことがない癒やしや娯楽を提供する、世界で初めての専門国家となつた。こうなつてみると県で分けると細かく、整理するのほとんどない労力を使う。そこで管理しやすいように、ハツに区分したのだ。

ここは中国州。つまり元中国地方だ。そこは、娯楽施設が建ち並ぶ中心街。周りは色とりどりの建物やラジコンのように動く独創的な看板。間を縫うようにしないと歩けないと歩けないほどの人の群れ。

現在夏休み。学校という牢獄から一時期の釈放を許された元気な若者が、この人ごみの半数以上を占める。

ひしめき合つように建物が建つているが、実際はエアコンや換気扇設置のため、建物の間には人が入れるくらいの隙間が空いている。そこでは、連日のように罵声や怒号、悲鳴があがる。

繁華街では、やはりお金がものをいう。そこでお金がほしいと思う若者たちは、路地裏にターゲットを引っ張り込み、恐喝が日常的に行われている。

もちろん、警察は路地裏をマークはしているが、建物の量が多いため、とても全ての路地を抑えることはできない。申し訳程度に監視カメラが置かれているくらいだ。

その中のひとつ。警察がない路地。今までに恐喝が行われていた。

「おら、金出しな。そうすれば殴らないでおいてやるぜ」

グヘヘと笑う焼けた肌の青年。その他に高校生くらいの少年が三人。合計四人で一人の少年を壁に追い込み、半円の形で囲っている。襲われている少年は中学生ぐらいに見える。

中学生は渋々、財布を取り出しそれを日焼けの青年に取り上げられる。

「おう、結構稼いでるじゃないか。ありがたく使わせてもうぜ」

中学生の財布には数十万のお金が入っていた。

何もこの子がお金持ちの家のお坊っちゃんという訳ではなく、この子のような中学生は大勢いる。その理由は、

この国では義務教育はそのままなのだが、それを終えた後の高校から大学の学費は、高く設定されている。

その一番の理由は犯罪数。

今の日本は義務教育が終わつただけでも就職は容易にできるようになつてゐる。娯楽施設は常に立ち続け、人手がほしい時期。どのような人材でも引く手数多なのだ。そのなかで高校や大学に行くのは、まだ社会に出て働きたくないという人達の集まりであると、陰口をたたかれる。なら高校・大学を出ることに意味はあるのか。

実は自分の店を持つ条件が高校・大学を卒業すること。もちろん、高校より大学を卒業したほうが利点はある。開ける店の種類が違うのだ。

例えば風俗関係は大学卒業の証明書がないと開けない。ゲームセンターは高校卒業で開けるがゲームショップは大学卒業生じゃないとダメだ。

このように卒業することに利点はあるのだ。

だが現実は高校・大学を卒業しても店を開かず、どこかの店に就

職するものがほとんど。

つまりは、まだ遊ぶために学校にいっているものが多いのだ。

この中学生がお金を持っていたのは、もう義務教育を終了して、衝いていたからだ。

財布を取り上げられた中学生は涙を流した。

一生懸命に働いたお金が、口の誰かもわからないヤンキーに金でもつていかれる屈辱と、向かっていこうとする勇気が出ない自分の情けなさ。

色々な思いが胸を締めつけた。足は震え、腰は砕けそう。背中の壁のおかげでからうじて、座り込んでしまつといつも見せない姿を見せないで下さい。

(警察は何をやつてんだー！）つづり事が起きなこよつに見廻つて
いぬんじやないのかー！）

とぶつけようのない苛立ちを、いない警察にぶつける。
誰か助けてくれないかと思つ。

路地裏を近道として使う人は結構いる。表の道の作りが、蛇のようにクネクネしたものとなっており、真っ直ぐに進むには路地裏を通るのが一番早いのだ。

何人かはここを通りうとしたが、彼ら四人の姿を見て、そそくさと引き返す。

（こいつらに捕まらなければ、今頃は友だちと楽しく遊んでいたのに！）

心の中でなら強姦でござれる。しかしながら」と考へたせいが

「ん? 何睨んできてんだお前? ぶつ殺すぞ!」

と言われ胸ぐらを掴まれる。どうやら顔にててしまったみたいだ。不良は胸ぐらを掴んだ手とは逆の手を後ろに引き、構える。

「お前みたいな向かってくる勇氣もねえ奴が、睨みつけてくるんじやねえよ。ああ、イラつとした。見逃してやうと思つたけど、止めだ。ボコボコにしてやるから覚悟しろ」

予想外のことの中学生は愕然とする。体中がガクガク震え、目からは涙もでてきた。嫌だと口で言つことも出来ず、ただ殴られるのを、目を瞑つて待つていることしか出来ない。

すると、

ドスンという音とともに、グエッという声が聞こえた。

胸ぐらを掴んでいた手が釈かれ、何事かと目をゆっくりと開けてみる。

ヤンキーの取り巻きの一人が倒れている。その横には今まで居なかつた人が頭から血を出しながらピクピクしていた。

なんとなくだが、あの血が出ている人が、上から落ちてきて取り巻きの一人にぶつかつたんだろうか。ドスンつていつてたし。

周りのヤンキーも、何が起きたかわからない。仲間が一人やられたのだが、やつた張本人は血を流し、痙攣している。

これ以上はどうしようもない。誰も動けない時間が三十秒程過ぎた頃、ムクツと血まみれの青年が立ち上がる。

見た目二十歳ぐらい。黒のTシャツに黒のジャージ。靴はサンダルというラフな格好。髪の毛は短髪の黒。身長は百七十ぐらい。太つてはいない。その人は上を向いて

「何すんだ！死んじゃうだろ！すげく頭が痛いぞ！泣くぞ！」

と叫んだかと思うと突然オイオイと泣き出した。本氣で泣いている。未だにヤンキーも固まつたまま。

泣き止んだ後、周りのヤンキーに、

「おー逃げろー！今からならまだ間に合つー！命が惜しいなら早く全速力で汗を流してこいー！」

といきなりの強気発言。その言葉で固まつたままの彼らは解凍された。

一番ガタイのいい少年が青年（黒）の胸ぐらを掴み、

「なにを寝ぼけたことぬかしとんじゃーぶつ殺すぞー！」

と凄むが青年（黒）はガクガク震えながらも

「いいから逃げろつて。生きたまま地獄に落ちたくないだろ？
？騙されたと思って逃げてくれつて」

まつたく反省していない。そこでブツツンきたヤンキーは拳を振り上げ、顔面掛けて殴りがかつた。

それをまともに受け、顔が横を向く。クリーンヒットだった。肉を打つ鈍い音を初めて聞いた中学生は、ガクガクと震えている。

殴られた青年は、鼻血を出しながら殴ったヤンキーを見て、一言。

「もう知らないぞ」

と言つて全てを諦めたかのようにダランと体の力を抜いて四肢をなげうつた。なんだこいつ弱いぞとニヤニヤしだしたヤンキー軍団。しかし、そのあとにヤンキー軍団は、瞬時に全滅した。

中学生の少年が見たのは、

青年のように上から降りてきた者が胸ぐらを掴んだ奴と青年と一緒に上から踏みつけ地面に叩き伏せた。それを見て、また固まつた

ヤンキーを、近いほうから鳩尾に右ひざを入れてダウン。相手の首と手を取り、足を相手の後ろから足を蹴り上げ、そのまま後頭部から地面に落としてダウン。残り一人の青年は逃げ出しが降りてきた人のほうが速く、捕まつた青年はコケてしまい、追いかけた人はその上に乗つて後頭部をグーで殴り続けた。

ヤンキーの体の力が抜けたことを確認し、その人は立ち上がりつちに向かつて歩いてきた。

年齢は十代後半。長くて赤い髪を後ろで縛り、手にはバイクを運転する人がつけるグローブをはめている。服はクリーム色のワンピース。スカートは膝上ぐらい。靴は軍人が履くようないかついもの。顔が見えたときは、ドキッとするくらい綺麗だった。切れ長の目。整つた鼻と口。白い肌。

あの人を嫌いだなんて言つ人は、多分、ほんどいだらうと思えるくらいの美人。

その人は中学生のに、落ちていた財布を広いあげながら言つた。

「大丈夫？ ケガはない？」

中学生は財布を受けつとつて、ウンウンと首を縦に振つた。

「この辺りは物騒などころだから、早く家に帰りなさい。」

と美人に言われたら大体の人は言うことを聞く。中学生も御多分に漏れず、顔を赤くし、お礼を言つて去つて行つた。

少女はふうと息を吐き、後ろで寝ている青年（黒）の頭を思つくり踏みつけた。

何がが削れる音がした。

苦悶の声を上げながらその場で七転八倒する青年。痛みが落ち着いた頃にムクツと起き上がり、涙を溜めた目で少女を指さして言つ。

「ちゅつー・鼻がもげるー。」リッティッドを「リッティード」。

泣きべそかいた青年の主張を、少女は冷めた目で呟つ。

「別にもげたつて平氣でしょ。」達也はそんなことじでせりふもならないのだから

達也と呼ばれた青年は負けじと呟つ。

「確かにそうだな・・・って!だからといってやりすぎだー。そっちがその気ならこっちにも考えがある!あんたに、人権といつものを教えてやるー。」

達也は構える。この暴力に屈する訳にはいかないといつ強い思いを込めて、戦う覚悟だ。

対して少女は構えもせず、ただ立つている。

「やれるものならやつてみなさい

その言葉が引き金となつた。達也は少女に組み付こつとする。が、それを少女は体全体を左に向けて躲し、カウンターで達也の顔を殴り飛ばす。

「ブフオ!」

堪らず達也は顔を抑え、俯く。そのスキに少女は、相手の後頭部に向かつて踵を落とす。

「ゴキン」という音を聞いた後、そこには地面に倒れ付した達也がいた。

少女は髪をかきあげながら呟つ。

「まだまだ訓練が足りないみたいね。どうせなら、今から稽古をつけておしあげましょうか?」

といひ声を聞いた瞬間に、達也は土下座ポーズに移行。

「勘弁してください騎李栖様。どうか平和な暮らしをわたしてください」

男のプライドなんてものは犬にでも食わせてしまえ、とでも言つているような見事な土下座である。騎李栖きりすと呼ばれた少女も呆れて言ひ。

「あなたは本当に進歩しないわね。今まで私がなんのために、あなたを連れ回したと思つていいの?」

その間に達也は

「それはあなたの暇つぶしに付き合わされてるだけだ!僕は何も頼んじやしない!どんな恩の着せ方だ!」

「あら、 そななの? てっきり私は、達也もウキウキしながら、付いてきてこると思つていたのに・・・」

眉尻を下げて悲しそうな顔をする季李栖。

しかし、達也はこのパターンで一回、ひどい目にあつてゐる。ついわつきの状況がそれだ。

「もひその手には乗らないぞ季李栖。僕だつて學習はする」

達也は言つ。

「でも、どうしても一緒に来て欲しいなら一つ、条件がある」

季季栖は首をかしげながら言つ。

「条件?」

「やうだ」

達也はビシッと指を季季栖のスカートに向ける。

「スカートの中身をスペツツではなくパンツにしておつすれば僕は喜んでお前の側にいぢやー！」

言い切る前に季季栖は、どこかで拾つた鉄パイプを、達也の口に押し込んだ。

下男4（後書き）

まだまだ続くよ。

ト男5（前書き）

親父登場。

太陽が繁華街の隙間に落ちだした頃。

目が覚めると達也は路地に転がっていた。

季季栖はいない。どうやらあの後、彼女から殺戮演舞をもらつて気絶したらしい。

状況を整理できた達也は起き上がり、体に着いた土を払う。体の調子をチェックし、問題ないことを確認。

「さて、季季栖も帰つたみたいだし、帰るか」

達也はいつものことだと呟つみみたいに帰路につく。

路地を抜けた先の街は、昼間以上の光量を放つていた。

そこは、中国州の娯楽の中心街。あたりは電飾のオンパレードとBGMの爆音で溢れている。慣れない足がフラついてしまうほどの賑やかさ。さっきの場所とは大きく違いすぎるため、どこか別の世界にいつてしまつたようを感じる。

行き交う人の量も、減るどころかこれからが本番と増えている。達也はその中を歩き、駅へと向かう。

歩くこと十分。少しひらけた場所に出る。

そこは円の形をした駅前の公園だ。あやりこ、滑り台やブランコ、ジャングルジムなど、お決まりの遊具が置いてある。真ん中には小さな噴水があり、絶えず水をまき散らしている。

周りは木で囲まれており、向かって左には時計が建つていて。時刻は午後六時半。当たりはまだ明るいが、空気の匂いは夜へと移行しだしている。

達也は公園を突つ切り、目の前の駅へと移動する。

駅はこぢんまりとした無人の駅。五段ほどの階段を昇り、すぐ横にある切符の自動販売機で切符を購入。自動改札を抜け、駅の中へ。

時刻表を見てみると、次の電車まで十五分ほど空き時間。することもなく、達也は近くのベンチに座り一息つく。

小さい屋根より少し前を見上げれば、薄雲から覗く薄青の空がとても綺麗だ。

今日のことを振り返ってみる。散々な一日だった。今年中の不幸が全部来たみたいに感じる。

そもそもこんなことになつたのは俺の好奇心が招いた結果だったことを思い出す。

藤見達也。大学二年。普段は四国州の大学に通つているため中国州にはいない。だが、大学が夏休みに入つたので久しぶりに実家に帰ってきたのだ。

天気は晴天。遠くに大きな入道雲が見えるが、それ以外は面白くもない空。

達也は電車を降り、懐かしい匂いのする空気を胸いっぱいに吸い込んだ。両手には大きな鞄。服などが入つていて。

「はあ。やつぱり住み慣れた土地は落ち着くなあ・・・!？」

達也はギョッとした。

達也の記憶が確かなら、この辺は田園風景が広がつてゐるはず。しかし、達也は見た。

田んぼのど真ん中に、城のようなものが建つてゐる光景を。

遠くからでは大きさはよくわからないが、百メートルぐらいの高さはある。

「おいおい・・・あれ、通報されないのか?」

達也の住んでる地域は農業生産区域といつとこ。娯楽に特化したといつても、ここは日本。外国の旅行者の中には日本食を求めてやってくる人もいる。

ほとんどの食料が輸入に頼っている日本。しかし、日本の伝統を廃れさす訳にはいかない。

それを楽しみに来るお客様も多くいる。

そこで地域一帯を、その専門区域に指定し、伝統を守る場にしているのだ。

達也の区域はその中のお米の専門。日本の純粹米を生産することを義務づけられた土地なのだ。ここのお米は基本、寿司や懷石料理に使われている。

もちろん景色も伝統の内、といつことで家の外見は江戸時代のよくな平屋の建物が決まりとなつてこむ。

その景色に洋風の城が建つてているのは、明らかに違反だ。違反するものを作ると取り壊され、また法律違反で罰せられる。達也は呆れた。

「一体何者なんだろ？あんなの建てたのは。すぐに取り壊されるぞ」

変な物があるなあ、と思いつつも久しづびりの田舎。早く実家に帰り、飯でも食わしてもらおうと考え、達也は歩き始める。見渡す限り田んぼと電柱。間隔を大きく開けて建つている家ばかり。

山間にあるここは緑色の色以外はあまり見えない。

蝉の鳴く声が、唯一中心街に負けない音を発している。

整備されていない土の道を歩く。この町（村？）の人々はみんな顔見知りだ。

前から歩いてきたおじさんがこちらに手を振つてい。

「おひ。達也じゅねえか。寂しくなつて帰つてきたのか？」

焼けた肌のやせたじいさん。肩には白いタオルをかけている。典型的な農家のじいさんだ。

達也は答える。

「元氣そだねじいさん。その憎まれ口が懐かしく感じじるよ。」

適当に挨拶を済ませ、達也は歩く。

家に着く間に近所の人達のほとんどと会つた。みんな元氣そだねによりだと達也は思う。

ふと、達也は疑問に思つていていたことを口にした。

「あのやあ、あのでかい城はいつ出来たの？僕が一年の時にはなかつたはずだけど」

達也は城を指差しながら聞く。すると実家の隣に住むトメばあさんが答えた。

「あれはあそうさなあ・・・あんたが生まれる前にこの土地を納めとつた領主が・・・」

何の話をしているんだと言つたが、トメさんは真面目に言つているので、ばかにできない。ツツ「ミミができる」。なので、達也はトメさんの隣のシゲさんと聞く。

「こつから？」

「あれは十五年前からだな」

シゲさんも真剣に答える。

「こやこやー、アメさんのボケた頃の「ことじやな」よー、城の話だよー。」

達也のシッ ハハを受けて、シゲさんは高らかに笑う。

「冗談だよ。確か・・・先月のあたまだつたかな。こじこじとつ越しに来た若い嬢ちゃんが住むために建てたらしに。」

「城を?」

「城を」

謎だらけだ。とりあえずこの話は置いといて、家に行こ。この暑さは堪らない。汗が止まらず、死にそうだ。

「そつか。じゃあそろそろ家に帰るよ。また後で」

おひ、と返事を受け、達也は家路を急ぐ。

駅から三十分。平屋の家が見える。そこが達也の家だ。

小さい頃はみんな同じ形の家だったのだが、よく間違えていたが、この壁に掘つた「当たり」の文字が目印になつてからはちゃんと帰ることができる。

さすがに今は目印がなくとも大丈夫だが。家が近づくにつれて愕然とする。

「あの城・・・僕んちの真ん前に建つてたのか

自分の家の目の前に黒を基調とした大きな城があった。

ドリキコラが住んでいそうな佇まいだが、やはり出来たばかり

とことことでキレイなものだ。

門は格子戸。その両端の壁の上には監視カメラがある。城は、その高さ五メートルの壁に囲まれていて、上には有刺鉄線が張り巡らされている。そのすぐ内側には木が植えてある。中の様子を見えにくくするためだ。

なんとか隙間を見つけ、覗くと中の様子は真ん中に丸い大きな花壇があり、向日葵などの色とりどりの花が咲いている。そこまでの道のりは、石で舗装されている。その周りの地面は芝生で覆われている。

道の突き当たりに扉がある。綺麗な彫り物がされた扉。そこに場違いのようにあるインターフォン。

「間違いないだけ日本じゃない」

半派半れる形で達也は、城から離れ向かいの実家へ。古い引き戸を開けて家に入る。

「ただいまつと」

中も江戸時代のような造りというわけではなく、一般の家と大して変わらない。

まず正面の玄関を抜けて、左の襖を開けると、そこはテレビが置いてある畳敷きの部屋。右はトイレ。さらに進むとタンスなどが置いてある寝室。テレビの部屋とは襖で繋がっている。

廊下の突き当たりの部屋が台所だ。食事をとる机と椅子が置いてあり、キッチンや食器棚、冷蔵庫がある。

流しの横には裏口があり、そこから裏庭に出られる。

達也は荷物を寝室に放り投げ、台所に向かう。冷蔵庫を開け、冷えた麦茶をコップに注ぐ。そのとき

「よつ。帰つてたのか」

台所の机の下から達也の父、
時記流じきりゅうが顔を出した。

ト男5（後書き）

まだまだ前半です。

下男6（前書き）

屋敷突入！

四角いメガネを掛けた細身の男が顔を覗かせている。頬り甲斐のなさそうな印象の男。

実際、小学六年生の従姉弟と腕相撲をして負けている。来ているものは作務衣。この格好で研究者だ。・・・普通、白衣じゃないのか？ 達也は慣れた調子で答える。

「ただいま。また研究所に籠つてたのか父さん。ちゃんと田んぼの世話をしないと、この土地追い出されるぞ」

「いやあ、なぜか今日は研究意欲が收まらなくてな。かれこれ三日は寝ていないと」

時記流は笑う。

「久しぶりだな達也。どうだ？ 大学は。楽しいか？」

下から這い出しながら聞く。

「うん。まあまあ。バイトが忙しことを除けば楽しこよ」

仕送りが少ないという嫌味の意味を込めて達也は言つ。それを流して、時記流は椅子に座る。

「ま、ゆっくりしていけ。母さんは今いなが

「だらづね」

達也は頷く。

達也の母は旅をするのが大好きだ。達也が生まれ、離乳食になつた頃、母は

「じゃあ後は頼んだ」

といつて旅に出た。あれから一年に数回しか帰つてこない。達也は麦茶を飲み干し、父に尋ねる。

「ねえ、あの城にはどんな人が住んでるんだ?」

「うん? 確か燃えるような色の髪をした女子高校生が住んでいたと思うが。一回挨拶に来たつきりだからな。あまり覚えていない。ただ!」

時記流は力強く言つ。

「超がつくほどの中年さんだったぞ!」

「美人!?」

達也も叫ぶ。

今まで恋愛らしい恋愛をしてこなかつた達也。興味がなかつたのではない。受け入れられたことがないのだ。それは達也の体质が原因なのだが。

達也は鼻を膨らませながら時記流に聞く。

「それでそれで!?」

「うむ。それ以外は記憶にない」

「こ」の役たたず

吐き捨てるように言つ達也。

「なんだよう！それが父に向かつて言つ言葉かよう！」

「俺も早く彼女の一人や二人は欲しいんだよ！少しは協力してよエロ親父！」

なんだとこの、と親子ゲンカ開始。
ずいぶんしようもないが、これがこの家族の日常だ。
もみ合つていろいろうちに、達也は時記流を押し飛ばす。

「家庭内暴力だぞ！お巡りをーん！」

時記流は外に向かつて叫ぶ。しかしここは田園地帯。隣近所の間隔も馬鹿にならないくらい広いのだ。当然交番まで声は届かない。

「一生やつてな。僕は挨拶がてら、城に行つてくる

「どうせ美人の顔が見たいだけだら」

「ほつといてくれ。僕にもそろそろ春が来てもおかしくないんだ。
それを取りにいくだけさ」

「お前は高望みしすぎだ。あんな美人がお前に惚れるわけないだろ
う。私と違つて達也はパツとしない顔だからな」

「こんの一・・・人が気にしていることを。だが、こ」まできたら、失うものはなにもない。勝ち取るだけだ」

「言つなり立ち上がり、玄関に向かい、靴を履く。

「まあ待て。まださつき、突き飛ばされたお礼をしていいぞ？」

「うん？」と後ろを振り向くと

筋肉ムキムキの大男が立つていた。

「！」

それに気づいた達也は、玄関へダッシュ。しかし遅かった。大男の大木のような腕の一撃を背中にモロにくらい、吹っ飛んだ。

玄関を突き破り家の前の道まで飛ぶ。

「！」・・・は！

激痛と酸素不足で目眩がする。地面に蹲り、動けない。

なんとか体制を立て直そうとするが、すでに大男が目の前に立つていた。

「おいおい。こんなで終わりとはおもしろくねえぞ小僧。おまえ、前より弱くなつてねえか？」

そう言つて達也の頭を掴み、軽々と持ち上げる。

達也の体重は決して重いほうではない。が、一般的の青年体重を片手で持ち上げるのは普通、不可能だ。それを楽にやつてのける腕力は、想像を超えている。

「は・・・ハイドになるのは反則だぞ糞親父！」

悪態をつくが、相手は気にもしていない。

ハイドと呼ばれた大男は笑う

「お前が最初に手をだしてきたんだろうが。甘つたれたこといつて
んじゃねえよ」

掴んだ達也を振りかぶり、地面に叩きつける。

地面が陥没した。達也は体中の骨が折れる音を聞いた。

「いや、こらで勘弁してやるか」

ハイドは手を離し、達也を解放する。

「ううほーほ・・・くそ、相変わらず性格が変わりすぎだ」

このハイドと呼ばれている大男は達也の父の時記流だ。彼は酒を飲むとハイドという大男に変わる。性格だけでなく、見た目も。

筋骨隆々の焼けた肌にスキンヘッドの頭。目付きは鋭く、歯は全てサメのようにギザギザ。まるでホラー映画に出てくる怪物だ。吃了たライオンでもここつを襲うことはないだろ。

時記流とハイドは別々の性格をしている。

基本的に時記流は大人しく、ハイドは好戦的だ。ハイドは時記流とはまた別の記憶を持っている。一人の体に一人分の人間が入つているようなものだ。

小さい頃、母がないときに親父が酒を間違つて飲んで最悪な自体になつたころを思い出す。たまたま帰つてきた母が、ハイドを沈めたのだが。今思えばこいつを倒すつて……。

生まれつきこのような体だった訳ではない。

これは今、時記流が研究しているものに関連している。

気づけばハイドは、時記流へと変わっていた。

時記流は腕を組んで叫ぶ。

「暴力反対！」

「あんたに言われたくないわ！」

達也も精一杯の言葉を放つ。

達也は汚れた服を着替えに一旦家に帰り、改めて城に向かう。
時記流は達也に親指を立てて

「グッドラック！」

と見送った。

達也是無視して行く。

玄関を出て、向かいの城へと移動する。

近くで見るとものすごく大きい。白雪姫でも住んでいそうだ。
下は四角く造られ、その真ん中に大きな塔のようなものが建つて
いる。それを囲むように下の四角の角それから、同じ形の真ん
中の塔より少し短いものが建っている。

城の前にくると、なんとなく入りにくい雰囲気。

時刻は午後一時。まだまだ夏らしい日差しを浴びせているはずな
のに、なぜか城の中は暗く感じる。立派な家というのをそれだけで
異質なものだ。

例えばいつも安いファミレスに行く人が奮発して高級料理店に入
るときの疎外感に似ている。

達也是挨拶するだけと心の中で唱え、なぜか冷や汗をだしながら

格子戸を開ける。

なぜインターフォンを外の格子戸の方へつけなかつたのか疑問に思つが、監視カメラ見て納得する。

（なるほど。監視カメラに訪ねて來た人物をちゃんと納めるために、わざわざ中の扉にインターフォンを付けたのか）

監視カメラの存在自体が防犯になつてゐる。泥棒だつて見える位置にカメラがあれば近寄らないだらう。だが、それでも中に入つてくる人はちゃんとした用事がある者か、度胸のある泥棒かのどちらかだ。

（まあ監視カメラを潜られたら意味ないけど）

達也は庭に入る。

石畳の道はとても歩きにくい。石と石の間に足が入ればコケそうになる気がして、達也は下を見て歩く。

突然弾丸が足を貫いた。

「え・・・・あ」

その場で膝をつく達也。撃たれたのは右足の太もも。ここを撃たれたら立ち上がることは出来ない。力を入れる度に激痛が走り、立つ氣力が削がれる。普通なら。

しかし達也は何事もなかつたかのように立ち上がる。血も止まつてない。まるで撃たれていないように見える。達也は近くの噴水までダッシュした。

撃たれたということは撃つものを持った何かが近くにいるということだ。あそこで止まつたままだと確實に息の根を止められる。

噴水に到着する。撃つてきたと思われる方向とは逆の位置に滑り込み、背中を噴水の壁に預ける。噴水の形は円で囲まれた池の真ん中に水を出す細い彫刻が建つていて、大した遮蔽物にはならない。

しかし絶えず水を噴出していることと、少しの壁があるだけで達也の心の安定は変わる。

「くそ！なんなんだ！？なんで撃たれた！？」

混乱する達也。

さつ今まで町の住人と談話し、親父とはひと悶着あつたが、いつものことなので日常の一貫として収められる。

だが、銃で撃たれることは非日常だ。

達也はこれまでの人生のなかで普段、人が経験しないようなことをいくつも遭つて来ている。

実際に銃で撃たれたことは何回がある。しかし、基本その時は逃げていた。

だが、広いようで逃げるには狭い城の敷地。最悪なのは出口がある門しかないということ。

撃つてきたやつは確実に門を抑えているはずだ。逃げるなり・・・

「裏をかけて城に逃げ込む！」

城への入口までの距離は約三十メートル。

達也は心中でカウントダウンを始める。いろいろんな経験をしたとはいえ、恐いものは恐い。既に足は震え、涙がでてきそうになる。

「９・・・じゅうー」

ダッシュした。

石の道を走る。田は入口だけを見つめる。よそ見はせず、目的地に向かつて突き進む。

銃の乱射音が聞こえる。放たれた弾が達也の周りで跳ねた。今は被弾していないが、時間の問題だらう。距離はあと十五メートル。時間にしておよそ四秒。目的地はすぐだ。

だが、この城は甘くなかった。

目の前には地雷原のマークが着いた看板。

「ここにきて何このギャグみたいな看板！ てか、玄関に地雷つて訪問販売対策にしちゃやりすぎだ！」

意外とツツノを入れる余裕があるものだな・・・と達也は思う。どうやらこの地雷マークはツボにはまつたらしい。だが止まる訳にはいかない。既に

全身に十数発の弾丸を受けている。

地雷原で止まってしまえば即ミンチだ。お肉屋さんに並ぶことを喜びとしない達也は決意する。

「どうか、飛び越えられるぐらいのものであつてくれよ！」

看板手前で達也はジャンプした。飛び出した感じは申し分ない。これなら五、六メートルは行けるだらう。

達也が先の地面に目を向けると

わかりやすく埋まっている地雷の畠が見えた。

地面が盛り上がり、よく見れば歩けば避けられるぐらいの幅がある。しかし既に飛んでいる達也にはもう軌道の修正は出来ない。

（クソ！…銃で追い込まれた心理状態を読んで、空中で絶望できる
ようにしてある。嵌められた！）

入口を田の前にして達也は爆発の光の中に消えた。

向かいの達也の家では、時記流はのんびり麦茶を飲んでいた。研究の意欲は根こそぎ達也に奪われたようで、何をするでもなくボーッとしている。その静けさのなかで

「ん？ どこからか軽機関銃の音が聞こえる」

時記流も昔はわんぱくだった。その度が過ぎて、一部の組織に狙われたこともある。そこで聞いた音に似ていたのだ。続いては

「今度は爆発音か？ どこかでアクション映画でも撮っているのか？」

茶を飲みながらつぶやく。今までに息子が大変な目に遭っているのだが、そんなことは露にも思っていない。時記流の頭の中は

（今頃達也は向かいの子とよろしくやつてるのかな。くー…羨ましい…母さーん！ 早く帰つてきてくれーー！ 淋しいよーー…）

孤独でつっぱいだった。

111は城の中の一室。電気はついていないが、それを補つほど多くのモニターが光を放っている。その量は膨大で、六疊ほどの部屋の壁全てがモニターで埋めつくされている。

その真ん中に座る影。長い髪を鬱陶しそうに搔掻げ、ジッと田の前のモニターを見ている。

どこのモニターは監視カメラの映像を移している。噴水を上か

ら写したものや、下から城の入口を写したものなど、いろんな角度からの映像が飛び交っている。

その中で今、地雷の爆発で上がった土煙でなにも見えないモニターを見つめている。

(死んだかな)

煙の動き方に変化は見られない。動きがないということは死んでいるのだろう。

(また知り合いの処理業の人に頼むか)

この時代、警察沙汰にならず消える事件は、年間数千件ほど存在する。そこで活躍しているのが処理業の人間だ。

処理業は犯罪などで表沙汰にできないものをきれいに片付けてくれる。死体の処理から証拠の隠滅まで。その働きは多種多様だ。そんな繋がりがあるということだけでも、この影がどんな世界で生きているのかが伺える。

溜め息を吐き、部屋の入口近くにある固定電話のもとへ行いつと椅子から立ち上がったとき

ピンポーン

呼出音がなつた

「！」

影はすぐさまモニターへ視線を向ける。玄関先が写っているモニターを覗くと、そこには服がボロボロになつてはいるが無傷で立っている達也の姿があつた。

ト男6（後書き）

ヒロインも登場で次回へ！

ト男7（前書き）

秘密が明らかに。

応答がないのでもう一度チャイムを鳴らす。

ピンポーン

本当はもう帰りたかったのだが

（帰るときも地雷や銃撃には会いたくない、それに、ここまでされたらどんな美人の殺し屋がいるのか確かめないと気が済まない！）

今の達也を動かしているのは少しの怒りと美人に会うという大きな期待だ。

下心MAXである。

服装のことは少し考えたが誰のせいでこうなったのかを考えると、少しも失礼とは思わない。むしろ、服代を請求してもいいんじゃないか、とまで思えるほど心にいくらかの余裕がある。

辛抱強く待つていると、

ギギイ

と大きな彫刻の入った扉が開いた。
そこから現れたのは

「・・・・・」

まぎれもない美人だった。

燃えるような赤い髪のポニーテール。服はクリーム色のワンピース。足は裸足だ。一見細く見える体は出るところは出でいて、とてもスタイルがいい。いや、むしろ胸だけは自己主張が強い。とても。顔は切れ長の目と整った鼻。小さい口。簡単に例えよう。どうな美人の顔だ。

「…………」

美人はとても驚いた顔をしている。それはそうだろう。あれだけの戦場をぐぐり抜けて無傷なのだ。普通なら、幽霊と見間違える。ここは最初の言葉が肝心だ、と達也は思つ。地獄のような歓迎を受けたが、美人登場で憤りは吹つ飛んだ。それより、今まで女性にはこの体のせいで逃げられたことを考える。心に深い傷を負つたのは一回や二回ではない。ここは相手が考えもつかないことを言うのがいいのではないか、と考え達也は

「俺と結婚していくださー」

求婚した。すると相手は

「あなた次第ね」

と澄ました顔で言つた。

意外な反応に逆に達也が固つた。今までにないパターンだ。まさか可能性を提示されるとは。

「あ・・・いや・・・え・・・本当に?」

「ええ。一・二聞きたいことがあるけど、それによつてはいいわよ

「結婚つていうのは、男女が一緒になるつてことですよ?全てが

「結婚の意味、べらり知つているわ」

「…………」

驚きを通り越して呆れる。いや、自分から求婚しておいてそれはなんだが。改めて彼女の印象を整理する。

強い、と達也は思う。物理的強さではなく、内面の強さだ。言葉に力があり、この自分に一切の恐れを感じていない。普通会つたばかりの相手に、結婚を申し込まれたら即、通報。ましてや自分のようなバケモノみたいな相手なら特に。

（しかもクールだ……）

達也はこの子に惚れそうだった。

達也は頬を搔きながら会話する。

「じゃあ……質問つて言つのは？」

「立ち話もなんだし……どうぞ、入つて」

達也は城に招かれた。

一体どんな家なんだろう、と達也は想像を膨らます。大体、城に入るなんて初めてだ。なかなか経験できるものではない。この際、じっくり見ていこう。と半ば観光客のような気持ちになつてている。わからなくなる。城に住んでいる人と出会うことは普通じゃ考えられない。まして、その住人が美人なら尚更、内装に期待してしまう。そうでしょう？

開けられた大扉をくぐり、達也は中へと入った。そこには

真ん中にちやぶ台が一個だけだった。

「……はい？」

達也はドアと部屋の境界で固まつた。

えーっと、これはツツ「ミミ」を期待しているんだろ? など、達也はセオリー通りに考える。よし!

「純和風じゃん!」

ビシツと少女にツツ「ミミ」だ。少女は

「スーシー、テンプーラ、フジヤマー」

抑揚のない声で答えた。

「あんた、日本をなめてるな?」

案外、ノリがいいのかもしれない。

改めて、周りを見る。

ど真ん中にちゃぶ台があり、約六畳ほどの畳が敷いてある。そのほかは、城の中だと思わせる内装だった。

光源はシャンデリア。それも以上に大きい。細かな電球がいくつも付いていて、真ん中に、大きな電球がひとつ。値段は考えたくもない。左右とも大きな石の柱が立っている。像などの置物類はない。周りの色は全て白色で統一されていて、外よりも明るく感じる。ちやぶ台の奥には、人が横に四人並んで登れる階段があり、二階には多くの部屋のドアが並んでいる。

他の階段は見当たらない。多分、どこかの部屋から上にあがれるのだろう。

ボーッと突つ立つていると、少女が中に入るよう促す。

促されるままに、達也はようやく城の中に入る。三歩程進むと少女から待つて、と静止を受けた。

「？なんだ？」

問い合わせに答える少女。なにやらコモロンをビームからか取り出し、操作しながら、

「話す前に、あなたが危険人物ではないか調べさせてもらひつわ」

そう言つて少女はリモコンから視線を離す。
達也のすぐ目の前から長方形のゲートが下からせり出できた。

「あれは・・・もしかして空港とかにある金属探知機か？」

「ええ。あなたが危険物を持つていなかチェックさせてもらひつわ」

さあ、と言われ、達也はゲートを潜る。ポーンという音がなる。
どうやら大丈夫らしい。

「危険物は持つていなかわね。なひ、合格よ。あの机のところに座つていて」

（それだけでいいのか・・・）

ちやぶ台を指され、達也は畳敷きの手前で靴を脱ぎ、出入口を背にして座る。

少女はどこかに行つてしまつた。飲み物でも出してくれるのだろうか。

「うーん」

達也は考える。城に着いてからとこゝもの、おかしなことが多過ぎ

ぎる。まず、庭の防衛設備だ。あれほどの設備は日本にはいらない。いくら昔に比べて、犯罪件数が上がつたとはいえ、過剰だ。

次に求婚した件。あからさまに俺が悪いのだが、まさか条件付きでオッケーがでるとは。

ここが既におかしい。なぜなら、弾丸の雨と地雷の煙を乗り越えた奴が無傷で立つていて、その男を家に招くとは常識では考えられない。

そして自分だ。思つていたよりも美人さんなので、撃たれ、爆撃された怒りが一瞬にして吹つ飛んでいる。

あの少女は一体なんなんだ？

（グダグダ考へても仕方ないか。本人に直接聞くのが早いだらう）

そんなことを考へていると、階段から少女が降りてきた。一階には部屋がひとつないという造り。言つてしまえばとてつもなく広い玄関だ。

つまり生活関連の設備は一階にあるということ。一階から少女が降りてくるのはわかるが・・・

（お付きの人とかはいないのか？）

これだけの城だ。一人で維持出来る訳がない。使用人の一人や三人は居てもおかしくない。しかし、少女自らお茶を持ってきたということは、今はいないということだろう。

達也は少女が持つてきたお茶をありがたく受け取る。

少女は達也の向かいに座り、やつと話ができる体制になつた。お茶を啜り、達也が先に質問する。

石の壁などしかないこの空間では質問の声にエコーが混じる。

「あのや・・・結婚の話は本気なのか？」

一番気になつていたのがこれだ。だつて結婚ですよ？いろんな段取りふつ飛ばしていきなり夫婦になるなんて・・・。テ・ン・ショ・ン・み・な・ぎ・つ・て・き・たあああ！

「構わないわ。最初に言つたように、質問に答えてくれた後に考え方をせてもうつ」

決まつた訳ではないが質問の中身によつては俺の人生が決まる。」ぐりと唾を飲む。

達也は身構えて言ひ。

「じゃあ、どうぞ」

少女は髪をかきあげ、

「まずは自己紹介から。私の名は真相騎李栖。しんそうきりす最近ここに引っ越してきたの。年齢は十七。よろしく」

お茶を啜る騎李栖。

「じゃあ次は僕だな。名前は藤見達也。向かいの家に住んでいて、四国州の大学に通つている一年。年齢は二十歳だ」

「これからが本番だ。」

「真相さん。あなたの聞きたいことは？」

つたない敬語を使う達也。それを見て騎李栖は、

「敬語は使わなくていいわ。それと苗字よりも名前で呼んでいい。そのほうが気楽でしょう。名前も呼び捨てで構わない」

「おーけー。じゃあ騎李栖。僕の何が聞きたいんだ?」

ある程度の予測はついているが、一応聞いてみる。

「あなたの正体よ。あの銃撃と爆発の中、あなたは無傷で立つていたわ。普通はありえないことよ。どこかの軍人?それとも幽霊?」

もし、本当にこの子に幽霊です、ていつたらどうなるんだり?・
・いや、やめておこう。あまりいい想像ができなかい。

「单刀直入に言おう。僕はフジミだ」

「苗字は知っているわ」

「いやいやー? そうじゃなくて、不死身! 死ない体なのー! 僕はー!」

冷静にボケているのか、マジなのかがわからない。難しい子だな。
そこもまた、いいんだけど

「僕の父の一族は代々、不死身なんだ。頭を吹っ飛ばされようが、
心臓を撃ち抜かれようが死ない。まあ、例外はあるけどね」

「例外?」

騎李栖は怪訝な顔をする。

「それはまたいつか。しかし、不死身といつても不老ではない。つ

まり年齢的な寿命があるのや。それ以外では死ない

騎李栖は目を細める。

「寿命は決まつてゐるのかしら?」

「いや、それこそ一般の人と同じ。何歳で死ぬかはわからない。一族の中で一番長生きしても約七十くらいだな」

「なるほど」

そう言つて騎李栖はおもむろに達也に何かを投げる。反射的に受け取つた達也は、なんだ?と手の中のモノを見てみる。

それは・・・

部屋に爆発音が鳴り響いた。

騎李栖は目の前のちゃぶ台を蹴り上げ、壁にする。騎李栖が投げたのは手榴弾。爆発してできた破片で相手を切り刻む戦略兵器。

直撃した達也は、その場で横に倒れていた。動きはない。騎李栖がちゃぶ台を除け、達也が視界に入った時、傷ひとつない達也が座つていた。

「・・・なるほどね。確かに不死身だわ」

どうやら納得してくれたらしく。

「だからと云つて――こんな確かめ方はないだろ?」

「なら、ほかの確かめ方がよかつたかしら?切つたり、炎つたり、

落としたり。まだまだ方法はあるわよ

「いいえ！結構です！」

達也は即答する。

そう、と騎李栖は次の質問を出す。

この子超怖い！

ところで、手榴弾は一体どこから出てきたんだ？と騎李栖の服装を見ながら思つ。

普通のワンピース。

・・・一体・・・

手榴弾で荒れた畠の上でも、お構いなく続く会話。家族構成や生まれた場所。今は何をしているかなど、まるでお見合いのようだ。これが最後の質問、と騎李栖は言つ。

「達也、あなた戦闘の経験は？」

いきなり物騒だな、と思つた。

が、いきなり手榴弾を投げてくれるよつな子だ。元々物騒な子なんだ、と情報を切り替える。

「戦闘つて言つてほびじじやないけど。ケンカぐらいかな

「ケンカつて、どれくらいの？」

「そりやあ、路地裏でのケンカだよ。なぜかトラブルに好かれる顔うじくてさ。モテモテで嫌になる

げんなりした顔で達也は言つ。

「そり。銃で撃たれたのも今回が初めてかしら?」

「確かに。昔に一回だけ撃たれたことがあったな。理由は忘れたけど」

あまり楽しい話題ではない上に、昔の傷まで掘り起こされ、テンションは下降ぎみ。

質問の理由はよくわからないが、いろいろあって疲れたし、そろそろ暇しそうかと、達也は立ち上がった。

「ちゃんと帰るよ。邪魔したね」

「あら、ゆっくつしてこつたらここの」

不死身の身でも、これ以上ここにいたり、命がいくつあっても足らない気がする。

「実は、さつき実家に帰ってきたばかりでね。自分の家で、ゆっくり休むことにするよ」

じゃあ、と騎李栖は畳の上に紙を広げた。

「これにサインしてこつて頂戴。この家のセキュリティに関して、一切口にしないこと。その誓約書よ」

字は英語で書いてあつた。・・・読めない。

「これ本当にその内容の誓約書? 後で金の請求とか来ない?」

「お金なんていらないわよ。」このセキュリティを突破したのは、

あなただけ。だから情報が漏れたら一大事なの」

防犯意識が強すぎる騎季栖。何かあったのだろうか。

・・・詮索はやめよ。興味本位で聞いてしまって、大変な目にあつたことは一度や一度ではない。そろそろ学ぶべきだ、と達也は心のなかで頷く。

「わかった。信じるよ。でも、生憎ハンコは持っていないんだが」

「拇印でいいわよ」

それなら、とサインをして、達也は帰った。

帰るときはもちろん、セキュリティーは切つて貰つた。

達也が帰った後のホールで騎季栖は咳く。

「銃や爆発物で攻撃されても、彼は怒らない。ほとんどビッシーハリだつたわね」

騎季栖は一階に上がる階段を昇りながら考える。

「一番大きいのは、不死身の特長ね。・・・使えるわ」

達也が聞いたら顔が青くなるようなことを声に出す。

ブツブツいいながら、騎季栖は一階のどこかの部屋に入つていつた。

ト男7（後書き）

さてさて、物語はここから始まる。

ト野8（前書き）

続
也。

次の日。

達也は実家で昼食を摂っていた。

今日も相変わらずの暑さ。日差しを直に浴びると肌がじりじりと痛む。

風は吹いているが、ぬるい感触しかしない。

そんな日のご飯はソーメンだ。硝子の器に、氷と水を入れ、そこに茹でたソーメンを入れる。つゆに潜らせてすすれば、もう最高！ そんな幸福タイムを過ごしていると

玄関のほうから破碎音が聞こえた。

ソーメンを吹き出す達也。何事かと、恐る恐る玄関へと続く廊下を覗き込む。

そこには騎李栖が立っていた。

いつもの赤い髪のポニーtail。今回は黄色のワンピース。靴が軍用靴だったことを除けばパーエフェクトだったのだが・・・。

「つていうか、何してくれてんの騎李栖さんー玄関壊すって・・・。また手榴弾か！？」

破壊魔を聞いただす達也。騎李栖はそんな達也に

「『めんなさい、急いでいるのよ』

じゅやひ流でていのじじい。

・・・慌てたらドア爆破するのかよ。

とにかく、昨日のクールなところが感じられない。何かあったのだ

りうか。

「どうしたんだ？ そんなに慌てて」

玄関のひとはひとまづ置いておけ。理由を尋ねると、

「どうあえず、外に出て」

手を引っ張られる達也。思えばこれが、初めて異性と手を繋いだ瞬間である。

密かに感動している達也を尻目に、騎李栖は自宅の庭へと進む。騎李栖邸の庭。そこには芝生と防風林があるだけの空間だった。普通、花でも植えればいいと思うのだが。まるで、公園である。そんな庭の真ん中に、一人の男が立っていた。その姿、顔、どう見たつて・・・

「ヤクザ屋さん？」

オールバックの黒髪、鋭い目付き、がつしりした体格。服は黒のスーツを身にまとっている。

それだけだと、少し恐いだけのサラリーマンのようだが、手に持っているものが異質だった。

ビジネス鞄ではなく、刃物を持っていた。いわゆるドス、というものだ。木目のついた綺麗な鞄に入っている。達也は何が起きているのか、さっぱりわからない。騎李栖に尋ねる。

「あのお・・・一体なんなんだ？ どうこう状況だ？」

騎李栖が答える前に、ヤクザが答える。

「それがツレかい？ 嬢ちゃん」

騎季栖はうなずきながら答える。

「ええ、 もうよ」

「なら、 話が畢え」

ヤクザは達也の目の前まで近づいてきた。

身長は達也より高い。百八十ぐらじだ。上から見下すよつて達也に

言ひへ。

「にじめやん。 いの嬢ちゃんに貸した百万円。 払つてもむりなつか

そこで達也はピーンと来る。

騎季栖の方を向き、

「やつぱり保証人の紙だったのかあー！」

泣きながら、騎季栖の肩を掴み、前後に揺らす。

騎季栖は揺れながらも冷静に答える。

何だつて？と動きが止まる。

「じゃあ、 あの人はなぜ、俺に借金の返済を求めるんだ？」

「あなたも無関係じゃ無くなつたからよ」

「いやいや、無関係ですよ？ 百万なんて、見たこともないし。」

すると騎季栖が達也の顔に何かの紙を広げて見せた。

それは、昨日達也がサインした用紙。

騎季栖は紙の英語の部分をきれいに剥がしていった。

どうやら英語の部分は下の用紙の上に貼つていたものらしい。

剥がした紙からかみ出でた文字は・・・

「・・・ 婚姻届？」

騎季栖は頷く。

「これがどうした・・・ どうわあ！ 結婚してることになつて俺たち！ しかも書いた覚えのないところが俺の字そつくりに書かれている！ 詐欺だ！ これが本当の結婚詐欺だ！」

「

オーマイガッ！ と達也は頭を抱える。やはり、契約はむちやんと確認しておくことだ。どんな罠があるかわからない。

そんなやりとりを見ていたヤクザも限界に達し、達也の胸ぐらを掴む。

「おい。お前らの『わい』は、俺にはどうでもええんや。はよ金返さんかいボケハ！」

ものすく怖いと達也は震える。

前回の騎季栖の家でもわかる通り、達也は基本的に臆病だ。

不死身の体をもつっていても、痛いものは痛いし、苦しいものは苦しい。

「そう言われても、そんな大金、家にはないですけど……。おい、騎李栖！こんな大きい家に住んでいるんだから、百万くらいあるだろ！？」

騎李栖は顔を横に振つて、

「ない」

ドチクショーニと吠える達也。

「なら仕方ないなあ。それなら嬢ちゃん。あんたは組の系列の店で働いてもらうで」

ヤクザは達也を投げ捨て、騎李栖の方へ向かう。顎をクイッと持ち上げ、

「中々の上手だ。これなら直ぐに借金返せるだ

その光景を見た時、達也の心が揺れ動いた。

元はと言えば、騎李栖のせいだから責任とつて働いてこい、という気持ち。

昨日今日会つた騎李栖だが、いくらなんでもそんなことさせられない、という気持ち。

揺れながらも、元来、優しい達也。覚悟を決めた。

「待て。騎李栖は連れて行かせない

ああ？とヤクザは達也に向く。

「兄ちゃん。勘違いしたらあかん。こいつは金を貸しとる身や。

金も返せん奴の身柄はこいつのもんやで。お前にとやかく言われる筋合いはないわボケ

「それでも、連れては行かせない。せめて少し待つもんらせんか？」

足が震える。今から始まるであろう戦いの予感で、既に心が折れそうだ。

「待てるかアホ。生意氣いよると殺すぞガキが

恐いが、こいつちだつて男だ。女の子が困つているのを見過すことはプライドに反する。

「殺されても、騎季栖を連れていかせません」

半ばヤケクソ氣味にヤクザと相対する達也。体の震えが相手に分かつてしまいそうなほどにパワーアップしている。

空気が変わり、呼吸をするたびに胸が痛い。ヤクザは動き出した。

「もう、おまえ邪魔や。消えろ」

そう言いながら、達也の顔を殴り飛ばした。

「が・・・あ・・・」

暴力に慣れた者の一撃は重く、達也は立つていられなくなり、その場に屈んだ。

「なんや。よつ噛み付いてくると思ったが、クソ弱いやないか」
「ひ

屈み混んでいる達也の頭を、ヤクザは踏みつけた。

達也の顔が地面と激突する。

草と土の匂いと、わずかな血の味。どうやら、殴られた時に口を切つたらしい。

達也は悔しさでいつぱいだつた。

しかし、思いとは逆に、恐怖のあまり、体に力がはいらない。ヤクザはその後も、何回も頭を踏みつけた。

硬い靴底が頭に当たる音と、ヤクザの笑い声だけが聞こえる。満足するだけ踏んだヤクザは、騎李栖に視線を向け、話を戻す。

「さて、これで邪魔な奴はおらんなつた。行こか、嬢ちゃん

ヤクザは騎李栖の手をとる。

騎李栖は溜め息を吐いた。こんなものかと思つ。家の厳重なセキュリティーを突破し、地雷を踏んでも無傷な達也が、ヤクザとのケンカでは、なんの役にもたたない。

（期待はずれ・・・だつたかしら）

少し、申し訳ない気持ちになつたが、まず、このおつせんをどうにかしないといけない。

このままだと本当に働かされそうだ。

「すみません。今思い出したのですが、お金のあてを見つけました。少しここで待つていてもらえますか？」

騎李栖は家にお金を取りに行くことを話す。

しかしヤクザは、

「それは働いて返しな。今更家にあつたと言われても遅いわ。金をここで返してもらうよりも、嬢ちゃんに働いてもらつたほうが儲けれそうやしな」

下卑た笑いをするヤクザ。

やつぱりダメだつたか、と騎李栖は納得する。

自宅を見たらわかる通り、騎李栖は大金持ちだ。

騎李栖の父は、いわゆるアラブの石油王と言われるもの。その豊富な財産を駆使して、日本やアメリカなどの優良な会社の株を買いまくり、その会社の殆どが成功している。

世の中の動きを見る目は抜群で、日本の娯楽施設化計画もいち早く参戦し、そこでも膨大な富を得た。

父の国は一夫多妻制で、妻が四人。子供が六人。

そのうちの一人が騎李栖だ。

父が権力者ということもあって、四人の母は、父に媚を売る毎日。父が死んだとき、自分の子供に後を継がせさせてもらつためだ。

媚びる母とドロドロな家族関係。

それに嫌気がさした騎李栖は、父に一人暮らしを提案した。

父は寛大で、すぐに許しが出た。

ちなみに騎李栖の母は日本人。

母の生まれ故郷を一日見るために、騎李栖は日本に渡ってきたのだ。

だから、そもそも百万を借りる理由はない。

この状況は、騎李栖が達也の力を見たいがために用意したのだ。

不死身としての戦い方。

決して死ぬことがない者にとつては軽いとさえ思つていた。だが、現実は違つた。

達也はものの数秒でやられた。臆病な性格であつたとしても、も

う少し頑張つてほしかつた。

夫婦になつたのも、借金の責任をつまく達也に負わせることがで
きると考えたからだ。

昨日借り、今日返す約束で。

普通は無理な話しだが、あひりあひりせ、儲けられればいいので、
あつさりと承諾した。

わざわざ結婚までしたのに、と騎季栖は残念がる。

「やうやう行ひつか、嬢ちゃん」

ヤクザは騎季栖の手を引いて、車まで歩を出しだ。なにやら、携帯
で電話をしている。

潮時かな、と騎季栖は男の手を振りほどいた。

突然の行動にヤクザは止まる。携帯をしまい、騎季栖に鋭い眼光を
向ける。

「なんや嬢ちゃん。いこひきて感なつたんかいな」

あからさまに苛立つてゐる。騎季栖は答える。

「当たり前よ。お金があるのに働かされるなんて、嫌に決まつてい
るわ」

「だがな、実際にまだ金は返してもうつてないんや。つまり、嬢ち
ゃんの所有権は、まだひつてあるあるわけや。わしのものをどうつよ
うがかつてやうが」

「屁理屈ね。吐き氣がするわ」

「おこおこ、相手見てケンカ売りな。なんなら、縛つていつてもい

いんやで

「出来るものならどうぞ」

騎李栖は構える。いつでも戦闘が始まつてもいいよ。

ヤクザは、なめられたもんや、と咳き、騎李栖に向かっていく。ヤクザは、騎李栖が傷物になつては商売にならないと考へ、目立たない胴体を狙いに定めた。

まず仕掛けたのはヤクザ。右の拳を騎李栖の鳩尾目掛けて振るつ。対する騎李栖は、相手の行動を予測し、相手の拳を右に流した。力だけなら、騎李栖は男には勝てない。それが暴力に慣れたものならなおさらだ。

相手の力を正面から受け取るのではなく、横にズラすことで、細腕でも相手の攻撃を避けることができる。

騎李栖はその技術を体得していた。

拳を流した行動と蹴りを出す動きは殆ど同時。騎李栖は相手の脇腹につま先を叩き込んだ。

「ハハハー。」

ヤクザは悶絶する。その隙に、相手の懷に潜り込む。

右手を取り、そのまま一本背負いした。だが、ただの一本背負いなら、相手はすぐさま起き上がるだろつ。

地面は芝生。アスファルトやコンクリートに叩きつけるならともかく、芝生はそれほどの攻撃力を持つていない。

騎李栖は完全には投げず、頭から垂直に叩きつけた。

「ゴキ、とう嫌な音がした。」

ヤクザはその場で痙攣。死んではいない。

「ふう・・・こんなものね」

息を吐き、自分の動きに満足する。

ヤクザが気絶していることを確認し、達也を起こしにいく。いつまで寝ているのか、不死身でも気絶するのか、等考えているとき、外から車の止まる音が聞こえた。

「？」

門のほうを見てみると、さつきのヤクザと同じ格好をした人物が三人。

「電話で仲間を呼んでいたのかしら。・・・厄介ね」

騎季栖は考える。

達也の力を測るため、セキュリティーのスイッチは切つてある。どうやら向こうにも、事の成り行きを把握したらしく、こちらに走つて来ている。

「しようがないわね。・・・どこまでできるかわからないけど、やるだけやってみましょ」

みすみす捕まる訳にはいかない。

逃げることも考えたが、そこで横になつている達也を置いていく訳にはいかない。

こちらが巻き込んだことには責任をとらないと。
気絶しているヤクザの懐からドスを取り、鞘を抜いて構える。

相手との距離は約三十メートル。

前かがみになり、走り出そうしたとき、
達也が立ち上がった。

ト男8（後書き）

達也のターン。

トヨウ(豊橋)

飛行機専門店。

「一」

騎李栖は驚き、動きを止める。
達也は走つてくるヤクザを見ている。

(・・・どうしたのかしら? また恐くて動けなくなつてているとか? .)

だとしたら、もつここの子に興味はないな、と考える騎李栖。
しかし、騎李栖の思いとは裏腹に、達也はヤクザに向かつて走り
出した。

「え・・・」

またも驚く。

さつきは一人のヤクザに手も足もでなかつた達也が、三人のヤク
ザに向かつていつている。

達也はまず、先頭にいるヤクザの顔を掴んだ。

掴まれたヤクザはそんなお構いなしに達也の腹を殴る。

だが、達也は殴られても手を離さない。むしろ、掴まれたヤクザ
がもがきだした。

「ぐう・・・」

離せ、と達也の手を引き剥がそうとするが、大の大人が両手を使
つても、顔から剥がれない。
達也はそのまま掴んだヤクザを持ち上げ、走つてくる一人に向か
つて投げ飛ばした。

軽く五メートルほど飛び、一人に激突。騎季栖は固まっている。

「ありえないわ・・・人一人をあんなにも投げ飛ばすなんて・・・。普通の筋力ではできないことよ」

ヤクザはその仕事柄、体を鍛えている。体重は軽く七十キロは超えているのだ。それを片手で投げることは普通、無理な話である。だが、達也はやつてのけた。

投げられたヤクザはドスを抜き、達也の腹直掛けで突き刺す。達也はそれを左手の二の腕と手首の間で受け止める。

血が吹き出る。

目からは涙。それでも、相手の頭に拳を振り落とす。

骨同士のぶつかる音が聞こえた。

ヤクザは鼻血を出して沈んだ。

残り一人。

二人は同時にチャ力を抜く。そして直ぐに発砲した。

腕、足、胴体。次々と打ち込まれていく。打たれた場所が弾丸を食らった反動で跳ねる。

しかし達也は倒れない。

向かつて右のヤクザに向かつて刺さっていたドスを引き抜き、投げる。

相手はそれを慌てて避ける。

その隙に達也は目の前まで迫り、相手の顔を横から思いつきり殴り飛ばした。

軽く飛び、相手は倒れ込む。

残りひとりは恐怖に駆られ、その場から逃走した。

当たり前だ。ドスが刺さり、弾丸を何発受けても平然と立つていたら、誰だつて逃げる。

車が出る音がして、この戦闘の終わりとなつた。

達也は騎季栖の方へ向く。

騎季栖はビクッと体が跳ねる。

達也は騎季栖に近づき、

「大丈夫か？ 怪我はないか？」

と心配する。

「ええ、大丈夫よ。あなたこそ、あれだけの銃弾を受けて、やっぱ
り平気なのね」

達也の体から弾が押し出され、地面に落ちていく。

「まあね。死なない体だから」

達也は笑顔だ。

だが、よく見ると体は小刻みに震えている。

騎季栖はそこでホッと安心する。そして、安心した自分がとても恥ずかしかった。

今までどんな困難があつても、恐怖を感じることは少なかつた。

しかし、達也の鬼気迫る感じは、予想外なこともあります、とても緊張した。

騎季栖は疑問を達也にぶつける。

「あなた、いきなり人が変わったかのように戦つてたわね。どうい
うことなの？」

達也は頬を搔きながら、

「ああ・・・」

頭をポリポリ搔く。

「？」

騎季栖は首を傾げる。

「無我夢中つてやつだね」

「・・・なるほど」

（「これは思つたより面白つてわね。達也をもつと強くすれば、私の目的の為に使えるわね」）

算段が終わり、達也に提案する。

「あなた。私と訓練しましょ」

「・・・へ？」

達也は変な声を出す。

「じつやう、あなたは強くなりたこつけ。私はあなたを強くする
ことが出来るわ」

騎季栖は続ける。

「もし、あなたが強くなるなら、この婚約、そのまままでいいわよ」

ぬうわあにいいいいい！！

「そして、あなたが私の理想の強さになれたら・・・・・この体。好きにしてくれていいわ」

騎李栖は自分の体が良く見えるようにポーズをとる。
達也は

（おいおいなんだこの展開！今まで、青春らしいことなんてなかつた。俺の人生のターニングポイントが…いま一目の前にある…）

達也はビシッと体制を直し、

「（一）指導よろしくお願ひ致します！」

おじぎをする。

騎李栖は笑顔で

「わかつたわ。頑張ってね。あ・な・た」

こうして地獄のような特訓が始まった。

目的地に着き、電車を降りる。

あれから一週間。

特訓といつても不良達とのケンカや揉め事に首を突っ込んだりと、実践指向の特訓をさせられた。

ケンカ慣れしたおかげか、度胸もついた。

・・・いつになつたら騎李栖は認めてくれるのだろうか・・・。
客観的に自分を見ると、ただのスケベ心でここまでこれたのだから、大したものだと思うし、呆れて物も言えないとも思う。

そんなことを考えているうちに家に着いた。

日はもひ、山の方へ沈みかけている。

騎季栖とは、夫婦の関係になつてはいるが、ビカウもまだ学生。住む場所はそれぞれの家。僕が認められたら一緒に住めるらしい。

(・・・がんばろうー)

もはや、人生も掛かっている一大プロジェクトにまで発展したお向かいさん問題。

達也の夏休みは青春真っ盛りだ。

次の日。

空は生憎の曇り空。それでも太陽の頑張りは変わらず、いつもより蒸し暑い。

午前十時。

達也はこの時間に起きる。

あまり寝すぎても時間が勿体ないし、だからとこつて早く寝るのも勿体ない。

十時あたりが、寝ている時間と起きている時間がちょうど同じになる。

ちなみに、父・時記流は、台所にある机の下。

そこに時記流の研究所への入口がある。

基本的に、そこから出でてくることはあまりなく、研究所で寝泊りしているのだ。

達也は、台所に行つて顔を洗い、トイレと着替えを済ませ、少し遅い朝ごはんを食べようと冷蔵庫を開けた時、

首元に軍用ナイフが突き立てられた。

達也の動きが止まる。

そして理解する。こんなことをしてくる人間は、一人しかいない。

「騎季栖。一体なんの用なんだ？」

ナイフの持ち主は静かに言つ。

「寝起き早々で悪いのだけれど、あなた、今朝のニュース見た？」

今朝のニュース？

「起きた時にすぐテレビは付けたけど、面白いモノでもあったの・・・」

言いながらピンと来た達也。

騎季栖がわざわざ話題に出していくところ「」とは、まさか今日は・

・

「面白そうな殺人事件が起きたみたいなの。現場もこの四国州のベッドアーランド。近いし、今すぐに行くわよ」

騎季栖は暇が大嫌いだ。毎日僕を痛めつけるのも本人の暇つぶしの為。

結婚も、実際は暇つぶしの一貫だとわかっている。
しかし！たとえ暇つぶしだとしても、結婚したという事実は変わらない。

あの綺麗でスタイルのいい騎季栖が、戸籍上僕のもの！今はそれだけでいい。・・・今は。

いざれは全てを手に入れる！それまでは我慢だ、僕！
それよりも、

「今すぐ！？っていうか、事件現場は今、警察が調べてるんだろ？行つたつて現場を見せてくれるわけじゃないんだから、無理だよ」

達也は無理無理と首を振る。

対して騎李栖は、なんだそんなことか、と話し出す。

「大丈夫よ。現場には夜中に忍び込む予定よ。それまでは周辺で話を聞きに行きましょ！」

「いや、夜でも誰かいるでしょ。それにそんなことしたら、公務執行妨害になるんじゃ・・・」

「それこそ問題ないわ。睡眠ガス入りの缶も準備しているし、泊まる場所も用意している。これだけ準備があつて、何が不満なのかしら」

「だから、事件に首突つ込むのは危な・・・」

文句を言おうとした達也の頭に響く単語があつたことを思い出す。

（泊まる？え、騎李栖と一人つきりで？いやしかし、今までの不良とのケンカとは訳が違う。僕はともかく騎李栖が危ない・・・ことはないか。でも、警察に捕まるのは嫌だなあ。監獄かお泊りか・・・）

愛か法か。

究極の狭間で揺れる達也。

（ここで騎李栖がダメ押し。

「今回の事件での出来栄えによつては、達也を認めてもらつたわ」

時間が止まつた。

達也は今の言葉の意味を頭で考える。つまつは・・・『ホールイン！？

法を投げ捨て、愛を取る達也。

映画でもよくある」とじやないか。愛がなによりも大事。

「わかつた騎季栖。行こう。ござ、事件の究明へ！」

ノリノリで出かけようとする達也の後ろで、騎季栖は、ちよちよわ、と呟いた。

「なんだなんだ？面白がつだな

机の下の扉から時記流が顔を出した。

「おはよひ、おまか、おじさま

騎季栖は頭を下げる。

「やあ騎季栖ちやん、おはよ。朝から息子とラブラブだねえ」

ナイフで脅されるのが?と玄関から戻ってきた達也は思つ。

「話は聞かせて貰つたよ。いいものがある

そういうと時記流はまた研究所に入り、数分後、また出てきた。手には針が止まつた銀色の懐中時計。

「「これを持つてこきなさい。多分、役に立つと思つよ」

達也は受け取り、おや？と時記流に尋ねる。

「父さん、これって・・・」

時記流は「ヤリと笑い、

「やうだ。それが必要だと思つぞ」

騎季栖には、なんのことだかわからない。

そんなやりとりの後、達也たちは事件現場へと動き出した。

達也と騎季栖はタクシーを拾い、四国州小豆島の東にある埋立地、四国ベッドアイランドに向かう。

タクシーの中で達也は今回の事件について聞いた。

「で、事件って一体なにが起つたんだ？」

騎季栖はええ、と頷き話す。

「ベッドアイランドのマンションの一室で、女性一人の死体を同僚の青年が発見。どうも仕事で聞きたいことがあつたらしく、女性の家を昨日の朝九時に訪ねたみたい。鍵が空いていたので中に入り、呼びかけても返事がない。おかしいと感じた青年は、部屋へと上がり、死体を発見する。

部屋は荒らされておらず、物取りの犯行ではないらしいわ。ただ・

・

騎季栖は「こじが重要とばかりにタメを作る。

「ただ、血が部屋いっぱいに散っていたことと、窓だけ綺麗なままだったこと。この二つが事件の不気味なところよ。

警察は顔見知りの犯行か無差別殺人とみて、捜査するらしいの

達也は後悔した。

殺人事件に関わるんだろうな、とは思っていたのだが、ここまで異常な事件。さすがに首を突っ込みたくない。

しかし、騎李栖は話を続ける。

「犠牲になつた被害者の死体には大きな刃物でめつた刺し、切り刻まれていたらしいわ。写真見る？」

そういうて写真を出してくるが、達也は見なかつた。

「致命傷になつたのは、喉を搔き切られたこと。骨までスッパリだわ。ここまで切れる刃物なんてあるのかしら」

達也は耳を塞いでいた。

「死亡推定時刻は午前零時から一時の間。その時間の防犯カメラにはなにも映つていない。以上が事件のあらましよ」

騎李栖が横の達也を見ると、耳を塞いでいたので、ちょうどいいと写真を見せた。もちろん瞼はがつちりと動かないよう指で抑えて。

「さああああ！何すんだあ！」

達也は耳から手をどけて目を覆う。

騎李栖は呆れながら話す。

「あなたねえ、これからその犯人を捕まえにいくのよ。それで大丈夫なの？」

「本物の死体の写真なんて見たことないから無理だよ！ていうか、なんでそんなもの持つてるんだ？それに、恐ろしく詳しいじゃないか、事件について」

訝しがる達也に騎李栖は言った。

「警察のデータにハッキングしたの。時間は約一分かかってないわ。気づかれてはいないはずよ」

簡単に言つ騎李栖に達也は鳥肌がたつ。

「ハック？ そんなことできるのか？」

「私はできないわ。知り合いに頼んで情報を引き抜いてもらつたのよ」

「どんな知り合いだよ・・・」

達也は騎李栖に聞わつたことを、少し後悔する。

「前に言つたけど、私の父は石油王で経営者。もちろん、ハッカーに攻撃されるなんて日常茶飯事。それを防ぐ為、専門の防衛団がいるの」

「それとハッカーの知り合いとどういづ関係が？」

騎季栖は話す。

「ハッカーを防ぐにはその手口を知ることが重要。ハッカーを抑えられるのはハッカーだけ。つまり、父はハッカーを育てる機関を作つて、それを防衛に当てているの。私の知り合いのハッカーというのは、父から預かった防衛団の一人よ」

騎季栖の父親つて一体・・・。

「それって、既に犯罪に手を染めているのでは？」

「ええ、あなたもこの情報を聞いたのだから同罪ね。たとえ捕まつても、私はお金の力で出てこられるけれど、あなたはどうかしら？捕まりたくなかったら、精々頑張つて犯人を捕まえることね」

NOOOOO!!

タクシーの中でもお構いなく、達也は悲痛の叫びを上げた。

下男9（後書き）

現場入りへ続く。

ト馬10（前書き）

続きをです。

達也の家から車で約一時間。

ベッドアイランドと島を繋ぐ、その名も正眠橋。橋を越えて事件現場近くに到着。

アスファルトやレンガでできた道路は、太陽から降り注ぐ熱を全て反射していく、予想気温よりもかなり暑く感じる。そんな中、達也と騎季栖は立ち尽くしていた。その理由は、

「おいおい・・・誰一人見えないぞ・・・」

「そうね」

人っ子一人いなかつた。

それもそのはず。このベッドアイランドは基本的に社会人を中心
に貸し出されている。

世間では夏休みだと騒いでも、社会人にとっては関係ない。皆、
仕事に岡かけているので外に人の気配は皆無。

「これじゃあ、情報収集もままならないな。おまけに、とても暑い」

「やっぱり不死身でも暑いのは辛いのね」

騎季栖は涼しい顔で言つ。

「あなたは今まで僕の何を見てきたんだ?毎日暑がつてたはずだけ
ど」

「あら、そうだったかしら」

「どうか、逆に君に聞きたいんだけど」

「何?」

達也は勢い良く、騎季栖を搔いて

「なぜ、汗をかいていない!?」

騎季栖はタクシーから出てから、汗ひとつかいていない。騎季栖の方こそ人間か?

「だつて、私はもつと暑い国の出身なのよ!」のくりこの暑さは慣れっこだわ

「それでも汗くじこは出ないと悪いけど……」

こんな問答をしつゝにきたわけじゃない。

ただでさえとても暑い中、人を探して話を聞きに行くのだから。一刻も早く、やることをやってしまおう。

「とつあえず歩こうか。誰かに歩くわすかもしれないし」

達也の提案で、一人は歩き出した。

周囲はマンションだらけ。

聞いてはいたが、本当に面白みのない島だ。本島は、娯楽で溢れかえっているところだ。

まさに、真逆の世界だ。

そう感じると、娯楽で埋めつくされた所も悪くない。

若干一名は、それさえも暇だところのだが。

歩くこと一十分。事件現場のマンションに到着。

問題の階は、テレビでよく見るビニールシートやテープで囲まれている。

そこにはまだ、事件解決のために頑張っている方が見える。道路には四台のパートカーに一題のワゴン車。

「やっぱり、まだ調べているわね」

「当たり前だ。昨日の今日だぞ」

まだ乗り込むことは困難だと分かり、仕方なく情報収集に戻る。だが、ここからはとても楽に、情報を集めることができた。

情報源は、事件現場の野次馬。

まだ、事件の熱がおさまらない人たちは結構いるらしく、マンション入口に三十人ほどの人集りが出来ている。

これはラッキーと、達也と騎李栖は情報を集める。

こちらも、野次馬のように見せ、一人一人、話しかける。

五人程調べた頃、達也は妙な話を聞いた。

「怪談話?」

達也は首を傾げる。

そうなのよ、とおばさんは話す。

「最近ねえ、変な話がこの島で流行つてんのよ。なんでも、今回の事件の状況と似ているとか

小太りのおばさんは頬に手をあて、話す。

「「Jでな話なのよ・・・」

ある大学生のAさんは、終電を過ぎてしまい帰れなくなつたBさんを、家に招待しました。Aさんの家は景色がとてもいいと評判なマンションに住んでいたので、Bさんは楽しみにしながら家に向かいました。

家についていたBさんは早速ベッドの反対側にある大きなブランダの窓から外を眺めました。

するとBさんは

「今からコノベーに行け」 といいました。

Aさんは

「えええ！帰つてきただばつかりだよ！？飲み物も食べ物も冷蔵庫の中に入つてゐから、別に買わなくとも大丈夫だよ」

と言つたのですが、BさんはしつこくAさんを誘いました。

Aさんは根負けし、ぶつぶつ言しながらも付きました。玄関まで着き、自動ドアをぐぐり、さあ行くかと移動し始めました。ですがBさんはコノベーがある方角と反対の方向に歩き始めました。Aさんはそつわじやないよ、と言つたのですが、Bさんはいや、こつちといつて黙々と歩き始めました。

さすがのAさんもなにかおかしいと感じ、Bさんに訪ねました。

「「Jでしたのー？ 一体なんなのー？」

するとBさんは、

「ここ」までくれば大丈夫かな」

と言い、Aさんの質問に答えました。

「実は私が窓を見ると、窓にベッドが写っていて、そのベッドの下に・・・鎌を持つた男が隠れていたの。そこで言つと殺されると思つたから、外に出て知らせようと思つて。今向かつているのは交番なの」

おばさんは、やつと言いたかつたことが言えた、といった感じでスッキリした顔をしている。

対するこひちはテンションダダ下がりである。その様子もおばさんのテンションを上げさせる。

「あら、ちょっと恐かつた? 男の子なんだから、これくらいは平氣よね?」

おほほ、と帰つていつたおばさん。

ただの噂とはいえ、あまりに不吉な話しだ。
気を取り直して、情報収集を再開する。

三十人全ての人からの情報収集は終わつた。

い
!

騎李栖の方も、なにやら顔がしかめつ面している。さすがの騎李栖も暑かつたのだろうか。

達也は騎季栖へと報告をしに行く。

「おーい、じつちも終わつたぞ」

騎季栖はしきりに「氣づき」

「ええ、じつちも終わつたわ

」

と返す。

お互いの情報を交換する。

すると、

「おーおー、三十人全員がこの噂を聞いたことがあるのか

「そうみたいね。犯人の形はめちゃくちゃだつたけれど。男や女。人や人外。精神病患者や、快楽殺人犯。ただ、ひとつだけはつきりしているのは・・・」

「みんなが、この話が事件に関係していると思つている。とにかく

「そうなのだ。三十人全員が同じ話を聞いたことがあると言つ、また、その話が事件に関係していると誰もが同じ疑問を持つていたのだ。

「やつにえば」

騎季栖は言つ。

「「」の話しさは都市伝説に似ているつて言つてた人がいたわ

そこで達也はなるほど、と手を打つ。

「どこかで聞いたことがあると思つたら、そつか・・・都市伝説だ」

「？」

騎李栖は首を傾げる。

「都市伝説っていうのはなんなの？」

「ええっとね、これは・・・」

「待つて」

聞いた騎李栖が止める。

「少し、涼しい場所に行きましょう。こんな街でも、喫茶店のひとつぐらいはあるはずよ

賛成!と達也は返事をする。

事件の重要な情報を手に入れた興奮の裏で、首を突っ込んだのではないか、と達也は少し後悔した。

午後一時。

事件現場から徒歩十分のところにある、喫茶店「ルベリエ」

内装は、どこかシックな造りになつており、とても落ち着く。

小さな音で、風に靡く木々の音が聞こえる。これが店内のBGM
らしい。

達也たちは、ここで先程聞き取りをした情報を交換する。

「やっぱり際立つて見えるのは噂話だな」

達也は、注文したアイスコーヒーを飲みながらメモ帳をめくる。

「わづね。これが事件と関係してくるとは思えないけれど」

騎季栖は、注文したストロベリーパフェをちまちま食べている。

「しかし、騎季栖がパフェを食べるとは思わなかつた」

「どうにつけ」と?」

「なんだか……イメージと違つ感じがして」

騎季栖はムツとした顔をする。

「失礼ね。私だって普通の高校生よ。年頃に合つた、食べたいもの
くらいはあるわよ」

それはそんなんだけど……と達也は苦笑い。

今までこの少女に「えらい田にあわされたからか、あまり年下の
イメージがない。

また、住んでいる家や、重火器の取り扱いに長けていることから、
まるで女子高生のイメージが湧かない。

パフェを食べている騎季栖は、なんだか不思議な感じだった。
さて、と達也は話を戻す。

「何個か、同じ情報があるね。これを抜き出していいつか」

達也はメモ帳に単語を書いていく。

「尊、事件と酷似。そのまかもチョロチョロあるナビ、際立つてこのまじの一つだな」

「わづね。端的にみて、やっぱつ尊がダンナシね」

娯楽の国、日本。娯楽になるものならなんでも来い、といつ風潮がある。

その中にもちひき、尊話も存在する。恐い話じや近所での尊話しなど様々だが、その伝達スピードは尋常でなく、ある一定の尊話は法律で禁止されているものもある。

騎季栖はいつものそれだと黙つてこなが、達也は少し違つひじ。騎季栖は訪ねる。

「達也。あなた、この尊話がとても氣になつてこるみたいね」

達也は頷く。

「うふ。やうなんだよ。ちよつと引つかかる」とがつてね

騎季栖はパフェを食べ終わり、スプーンを置く。

「ところで、やつが言つていた都市伝説つて何のまんなの?」

達也は驚いた顔をかる。

「えー? 知らないのー?」

「ええ、噂話に興味がなかつたから」

じゃあ、と達也は説明する。

「都市伝説つていうのはこれで一つのジャンルなんだ。恐い話や企業の話、物の話など、種類はたくさんある。今回の話は、恐い方の分類だね」

「いひんな話があるのね」

「そう。その中には、ありえないものが多いけど、極稀に、本物が混ざつていることがある。」

今回の話は【下界】といつ話しだ

「どんな話なの? 聴き取りの時には、私のところは誰も詳しくは知らないかったみたいだから、聞けなかつたの」

それはね、と達也はさつきおばさんに聞いた話をする。

騎季栖の反応は・・・

「ありえなくもないわね」

意外と否定はしなかつた。

「でしょ?だからあそこで集まつてた人は、ニュースで見たとき、この話と酷似しているとわかつたから気にしてるんだよ」

それに、と続ける。

「今回の話しが派生したものはいくつもある。部屋の中で死んで終

「わってしまつものもね」

「だからといって、これが事件に関係あるかどうかはわからないわ」

「だよねー」

「そもそも、犯人の手掛かりも何も聞き取れていない。私からすれば実りのない時間だつたわ」

騎季栖は少し、苛立つてゐる。

暑さのせいだと思いたい。
達也はでも、と続ける。

「せつかもビックリしたけど、この噂、あそここの集まりだけじゃなく、この島全体に広がつてゐて、このは少し変じゃないか？」

「どうして？」

騎季栖はハテナを作る。

「いくら娯楽に飢えていると言つても、この話だけしか広まつてしないのなら、都市伝説が広まつたんじやなくて、この話しだけが広まつたことになる」

確かに、と騎季栖。

「それじゃあ、意図的にその話だけを広めたつて、このの？それこそ、なんの為に？」

「理由はわからないけどさ、何かしら関係はあると思つんだよね」

うーんと達也は唸る。

そこで騎李栖が

「考へても仕方がないわよ。とりあえず、夜を待つて現場に行きましょう。話はそれからだわ」

と言つて、分析は終了。
夜を待つことになった。

まだまだまだ続きます。

ト馬1-1（前書き）

続きを読む。

深夜二時。

ベッドアイランドの夜は早い。

島から見える本島は、まだまだ毎晩並みの輝きを放つている。対するこちらは殆どが消灯し、眠りについている。

そんな暗闇を達也と騎李栖が歩く。

たどり着いた事件現場には、誰一人としていない。達也は呆れて言う。

「なんだあ？ 誰もいないぞ。サボってんのかな？」

「周りを見なさい。ほとんどの窓に明かりがついていない。みんな寝ているのよ」

だから？と達也は聞く。

「つまり、みんな寝ているから、ここに来る人もいないってことよ。よっぽど仕事好きの人の集まりらしいわねここは」

そんな話をしながら、騎李栖はドアを開ける。ボコボコと独特の音がして開いた。

「鍵かけないんだ」

「普通は好き好んでは来ないわよ

いふと思つけどなあ、と言つてこる達也を無視して、騎李栖は中に入る。

空気が変わった。

どんよりと淀んだ空間。
とてもない異臭。

別に怖くはないのだが、体がこの先に行くことを拒否しているか
のよう重い。

それでも騎李栖は進む。

廊下はなにも荒れてはいない。

ところどころで警察の仕事が垣間見える。
いろんなメモ書きや、なにかの粉の残りカス。リビングには死体
の形に線を引いている。

ドラマの刑事モノとよく似ていた。

騎李栖がリビングに入ると

「やつぱつここが犯行現場らしいわね」

そうとわかる絶対的なモノ。

騎李栖が見ている光景は

真つ赤な血の海。

夏場の夜。

血は腐つて生臭い匂いを発している。

異臭の原因はこれだ。

鼻が曲がる。

口で呼吸しても、この匂いが体に入つてくると思っただけで、
気持ちが悪い。

息をしたくないが、そういうわけにもいかない。

我慢して、騎李栖は死体があつた場所を見る。

死体の形からして、どうやら被害者一人は、寄り添つように座つ
ていたらしい。

片方の頭がもう一つの死体の肩に乗つけるような形をとつてている。
次に血の行き先を見てみる。

床、天井、壁と飛び散っているのに、

「なぜこの窓だけキレイなのかしら」

よく見てみると、窓ガラスには指紋ひとつ付いていない。
キレイすぎていた。

普通に生活していたら付くはずの指紋がない。
まるで鏡のようだ。

「犯人が吹いていったのかしら……。だとしても、なぜ……」

騎季栖は他を調べたが、特になんの成果もなかつた。
台所や風呂、トイレも見たが特に変なところはない。
さすがに警察も馬鹿ではないが、と騎季栖は半ば、証拠漁りをやめようと思つていたとき、

「やつぱりな……」

と呟いた達也の声を聞いた。
達也がいたのはリビング。

騎季栖は達也の方を見ると、達也は家を出るときにも、父からもつた銀の懐中時計を見ていた。

（確かにあれは壊れていたはずよね。……なのになぜ、ここで時計を見ているのかしら？）

好奇心で達也の時計を覗いてみると、

壊れていたはずの懐中時計の針がぐるぐる回っていた。

「これって・・・どういふこと?」

壊れて動かないはずの懐中時計。

それが今、まるで早送りしているように針が動いてくる。

壊れている物が動き出している、とこいつだけで、この部屋の異常さを知るには十分だ。

「この懐中時計はなんなのか?なぜ、この事件現場で動き出したのか?」

場の雰囲気も相まって、とても不気味だ。

疑問を達也にぶつける。

「これはね。ある物質の濃度を測るものなんだ」

突然の話に騎李栖は頭が回らない。

「物質?」

「そう物質。空気中に漂っているそれは、ここでは普通の濃度の数値を軽くオーバーしているみたい」

「どうこいつ? どなの?」

「これが事件の真相なんだよ、騎李栖」

訳がわからない。一体達也は何を言っているのか・・・。

「とりあえず、ここから出ましょ。あなたの話は、用意した部屋でじっくり聞いてあげるわ」

移動を促す騎李栖。

騎李栖のシャレになつていない攻撃を受けながら、達也たちは事件現場を後にした。

「一歩あ……確かに便利ついで一歩ば便利はござナシ」

深夜二時

達也は騎李栖が用意した一室にいる。問題なのは、間取りが全て、事件現場と同じといつこと。不気味このうえない。

「私が無意味な部屋を取るわけないでしょ？どうせなら検証も出来
るほうがいいじゃない」

「ここは事件があったマンション。そのひとつ下の階の十階の角部屋。

いまり、事件が起きた部屋の真下になら

じつも上の階であんな悲惨な事件が起きたせいで、このマンションから立ち退いた人が多くいるらしい。今いるこの部屋もその一つである。

部屋の中には布団が二つ。ポットや冷蔵庫、電子レンジなど、生活に必要なものは全部揃っている。たゞがお金持ちだな、と達也は関心する。

死体があつたところと同じ形のリビングで、騎李栖はお茶を一口飲み、話を切り出す。

「さあ、話してもううわよ。懐中時計の示す意味と、事件の真相といつのを」

騎李栖はイライラしている。

騎李栖は、幼い頃から色々な教育を受けてきた。

それは一般的な知識からそうではない知識。格闘術や兵法までも

騎李栖は吸収してきた。

今となつても学ぶことはやめず、取り入れるものは全てこの体に入ってきた。それなのに・・・

自分は何もわからなかつた。あの現場は、ただの殺人事件の起きた場所というだけ。さして、他の意味は取れなかつた。

それなのに、達也は他の意味を見つけたらしい。それがあの懐中時計が関係しているなら、それを知りたい。

知識的欲求とプライドがせめぎ合い、精神が落ち着かない。達也も一口お茶を飲み、質問に答えた。

「先に言つと、あれは人が起こした事件じゃない」

きつぱりと言つた。

「へ?どうこうこと?」

「つまり、人じゃないんだ犯人は」

余計にわからない。

「なにそれ・・・犯人はお化けとでも言つのかしら?」

騎李栖は溜め息を付く。

さつきまで真剣に落ち込んでいた自分が恥ずかしくなる。

(犯人がひとりじゃないって……馬鹿じゃないの)

しかし達也は真剣な顔で続ける。

「それに近いものがあるね。騎李栖なら知ってるんじゃないかな、
MハクIイIのことを」

「・・・」

聞いたことがある。

父が主催するコンペ。父が援助を出すのに足る会社かどうかを競う大会で、学会方面からMハクIイIのことを発表しているところがあった。確か・・・

「理想を現実に変える物質だつたかしら」

そう、と達也は頷く。

「あの発表が実質、初めて世間にMハクIイIを公表したことになる。でも、そんな物質が存在するわけがない、と一蹴されて終わつたけど」

あの時の父は、興味を持っていたが、他の者たちの大反発によって、資金援助ができなかつたんだつけ、と騎李栖は思い出す。

「お金がなくなつて、研究者はどんどんやめていった。僕の父さんもその一人だつたけど、どこからか調達したお金で、また研究を始めている」

達也は、ポケットから懐中時計を取り出し、

「これがその研究の成果のひとつだ」

懐中時計を開く。すると、

「針が・・・動いている・・・」

騎季栖は時計をよく見る。どう見てもただの懐中時計にしか見えない。

「針が動いているだろ?」これは時間を示しているんじゃない。MIIの濃度を示しているんだ」

「・・・でも、これだけじゃMIIが存在する証明にはならないわ

針が動いているだけでは、信じるのは出来ない。出来るわけがない。

ただの壊れた懐中時計かもしれないし、玩具かもしれない。騎季栖は疑う。

「まあ、話を最後まで聞いてくれ。とりあえず、MIIが存在すると仮定して、これは針の速度でその濃度を分ける。数値化はさすがにまだ無理らしいからね」

達也は続ける。

「そしてあの現場では、針が物凄く早く動いていた。これは、あそこでMIIの濃度が濃かつたことを示す。つまり、反応したんだ」

「反応・・・?」

「そう。M.I.T.は人の思いや願い。つまりは心に反応するんだ。世界中で奇跡と呼ばれたり、最悪の事件が起こったたら、その全てにこの物質が働いたと思つていい」

大きな話になってきたと騎李栖は少し、身構える。

「今までの事例の中で、この物質が反応したことが多い心境は、恐怖だ」

「恐怖？それは感情であつて、思いではないでしょ？」

「やつ。でも、感情と思いが合致したとき、M.I.T.はとてつもない反応をみせる。その合致が多かつたのが恐怖なんだ」

騎李栖は待つて、と達也を止める。

「M.I.T.の話しさもういいわ。問題なのは、それがこの事件とどう関係しているかよ」

「うだつた、と達也は謝る。

「「」めん。話を元に戻そつ。」」の島では、噂が広まっていたよね

騎李栖は頷く。

「ええ。都市伝説だつたかしら」

「「」」の都市伝説の面白い」といひながら、中には本物が混ざっていることがあるところ。あまりに残虐な事件はニュースにはならな

い。それが何処からか漏れて、噂となつて世間に流れゐる

達也はどんどんノッてくる。

「それを野次馬の人たちは全員知つていた。この島全体に広まつて
いるしね」

そろそろ四時。まだ田は昇つてこないが、仕事好きのこの住民
は、起きだす頃だろう。

眠気のせいか、達也はテンションが高くなつてゐる。

「M.I.Iの反応条件は、その思いの強さによる。
思いが強ければ強い程、反応しやすいんだ。それが思いの量による
ものか、質によるものかに分かれるけどね」

「それじゃ、一人の人間が、お金持ちになりたいと強く願えば叶う
つてこと?」

そんな夢のような物質が本当に存在するのなら、世界は混沌とし
ているはず。

「もちろん。その願いが強ければ。でも、生半可な強さではダメだ。
涙が枯れるほどの思いがないと反応しない」

「今回の事件はどうなの?そこまでの願いや思いではないと思つけ
れど・・・」

「いくらこの島の全員がその噂を知つてゐるとしても、そこまで
のものなのか。」

疑問を口にする騎李栖。

「確かに。だから、僕はこう考える。誰かが噂を流した。それに尾ひれを付けて。多分、さくらも何人かいるんだろう」

「冷めてしまったお茶を飲む達也。」

騎季栖の疑問は今だ晴れない。むしろ多くなる一方だ。

「つまりこういうことかしら。この島で、誰かが噂を流した。それは今回のような事件を起こす為。噂を流した人物は人の心に恐怖を植え付けることで、M.I.Tを反応させるのに足るモノに変えた」

でも一体なんの為に?」

「それはわからない。けど、僕が話を聞いたおばさんの反応からして、そんなに恐がってなかつたけどね」

今度は達也が疑問に思つ。

「私の方もそうだったわ。でも、もしその話が本当だとしたら・・・。結果として事件は起きた。これからは、この事件のせいに余計に噂の恐怖が信憑性を持つた」

「うん」と達也は頷く。

「多分・・・まだまだ事件は続くと思つ。警察ではどうしようもない事件が」

騎季栖はまだ、M.I.Tの話を信じていない。自分の目で確かめるまでは。

そこで騎季栖はふと、思つ。

「達也。あなたはなぜ、そこまでヨーローのことを言つてゐるの？いつもあなたなら、信じないでしょ」

いくら自分の父親がその研究をしてこるとしても、達也は暗い顔になる。

眉が寄り、目は下を向く。

「昔、ちょっととね・・・」

なにかあったのか、と聞きたい騎季栖だが、相手のトライウッドを話題にするほど、騎季栖はひどい女ではない。その話しあい今までこした。

なり、もつひとつ理由を尋ねる。

「といふで、なんでヨーロッパの名前なの？何かの頭文字を合わせたの？」

達也は少し恥ずかしそうに言った。

「うちの父さんが名付けたんだ。理由は、僕の母親。当時はまだ付き合つてもなかつたらしいけど、その時に母親にその名前を呼んでほしかったんだってわ」

「？」

意味がわからない。

「ヨーロッパ、猫の鳴き声に似てるだろ？それを母親に発音させて、喜んでたんだってさ。そういう。騎季栖も、結構可愛かったよ

ほあー。」

達也が言ふ終わる前に、ロリペンを抜いた手榴弾を口に突っ込み
んだ。

爆発し、達也の頭は吹っ飛んだ。

その横で、騎李栖は少し、顔を紅くして、

「可愛ー・・・」

まんざりでもなぞうだった。

下男1-1（後書き）

さあてどうなつていいくか。

ト男1-2（前書き）

お久しぶりです。仕事の都合、こんな時期まで何もできませんでした。見ていてくださった方に深く、お詫びします。といふことで、今回はお風呂シーンです。

午前五時。

空は青くなつてきている。それを見ると、寝不足で体が重くなつてくる。どうやら、結構な疲労が溜まつているらしい。

騎李栖は立ち上がり一言。

「お風呂に行くわ」

そういって風呂場に向かう。
この部屋には脱衣所がない。つまり、

（覗き放題だぞ達也！）

お気づきの通り、彼女はとても綺麗だ。そして体付きも、超高校生級である。

先程爆破された達也はムクつと起き上がり、

騎李栖が消えていった方向を凝視する。

「今行つたら確実に消される。しかし、俺は不死身。何をされても死にはしない。だが・・・」

爆発の衝撃で、もう一つの人格が顔を出している達也。こちらの方は、やや好戦的でエロい。

「あいつは俺が復活するまでの時間を熟知している・・・。」
・・やはり風呂に入った瞬間を狙っていくことにするか

そうと決まれば、達也は立ち上がり、風呂場まで足音を立てずに

移動する。

こんな機会は滅多にない。

戸籍上夫婦な騎李栖と達也。

だが、今まで何も夫婦らしいことなどしてはいない。

今回の事件に関わったのも、全ては騎李栖に自分を夫として認めさせる為。

達也がいることを承知で、騎李栖は風呂に入っている。これは・・

「無言のカモン!-?」

好戦的な人格は、少し馬鹿らしい。

静かに風呂前に到着。

下には騎李栖の服が落ちている。本当ならこれも堪能したいのだが・・

「これは罷だ」

多分、触ると手や足を喰いちぎる何かが出てくるはず。

冷や汗を流しながら達也は笑をみせる。

「俺を甘く見るなよ騎李栖。俺の目的はあくまでお前の裸だ。それ以外は目もくれないぜ」

風呂場からは、水の流れる音が聞こえる。ドアの磨りガラスに写っているシルエットは、それだけで効果抜群だ。

(ありがとう。神よ!-)

神がいるであらう場所に向かってお礼を言つ。

さて、ここからが本番だ。

騎季栖のことだ。必ずドアにも何かしらの仕掛けをしているはず。その他にも、トライップは田白押しのはずだ。

息をするようにトライップを仕掛けることが出来る//コタリー少女騎李栖。ならば・・・

「ここからは突貫じやああああああーーー」

意を決して突撃する達也。

まずは敷いてあるマット。

乗った瞬間に下から針が飛び出す。

足を貫かれた達也はそこに縫い止められる。

「ぐお・・・ちゅうじやこなーーー」

次にドアノブ。人を丸コゲに出来るほどの電流が達也を襲う。だが、達也は屈しない。ここまでは、まだ想像の範囲内だ。

「ここからが本番だあーーー」

黒コゲになりながら、達也はドアノブを回す。

そこには・・・

「・・・え?」

仁王立ちで待っている騎季栖だった。

何も纏わらず、隠しもせず、ただただ、達也を見ている。

(なにこれなにこれなにこれー?想定外すぎるぞこれはー?)

達也も固まる。しかし、目だけは忙しく動き回る。

白く、綺麗な肌・・・ではなかつた。驚くほど傷の痕。

体付きは普通の子よりも優れているのに、この傷がそれに影をついている。

胸から下にかけて、切られたような傷。脇腹やへその下にも。背中は見えないが、傷があるのだろうことは想像がつく。その衝撃をもって、達也は言葉を放つ。

「これは・・・遂に俺のものになる気になつたってこいつが、お！」

顔にフルオート射撃。

「女性でも楽に使える」がキャッチペーのレディースマシンガンが達也をひき肉にする。

達也が動かなくなつたといひで撃つのをやめる。

扉を閉める前に騎李栖は一言、

「・・・ありがとう」

せつからくのお礼も、達也には聞こえていなかつた。

午後一時。

達也はあまりの暑さと痛さに目が覚める。

(ここで・・・いは?)

達也が寝ていたのは風呂場の前。騎李栖に滅多打ちにされた場所でそのまま眠つてしまつたらしい。

「ひどことしててくれたよな・・・しかし・・・」

傷。

騎季栖がどんな生活を送ってきたのかは知らない。しかし、お金持ちである」と、厳重なセキュリティを設置したこと。

そこから大体の検討がつべ。

(まあ、別にいいか)

わざわざ心の傷を開かせることはしなくていい。問題なのは、これからの接し方だ。

目的とは別のものまで見てしまった。だが、裸を見たことも相まって、今回のオシオキがこれで済むはずがない。さりにランクが上の地獄が待っているはずだ。

「くつ・・・僕は男だ。甘んじてバツを受けよ。」

覚悟を決め、達也はリビングに戻る。そこには、テレビを見ている騎季栖がいた。

第一声。

ここが重要。

ありきたりな感じがいいと思い、達也は喋る。

「おはよつ、騎季栖

対する騎季栖は、

「事件よ」

いつもの冷めたイントネーションで返す。よかつた！怒つてないみたいだ！
ん・・・事件？

「事件つていつのは・・・俺のことかー?」

やばい!怒つてた!!

何言つているのよ・・・と騎李栖は呆れた顔で言い、

「また、同じ事件が起きたみたいよ。今度の被害者は男。部屋の間取りと殺され方は似ているわ」

達也もテレビを見る。

この島で、またもや獵奇殺人。M.I.Iの存在を知つてゐる者としては、早く解決したい。

騎李栖を正真正銘自分の奥さんにするために!!

「よし、今度はこの場所に行つてみよう」

ええ、と返す騎李栖。

早速、懐中時計手にとつた時、

「一。」

針がありえないスピードで回つていた。

物音がしないので騎李栖は達也を見やり、

「どうしたの?」

達也は騎李栖に時計を見せる。

「・・・これは」

「の反応の仕方は、先日の事件現場の時よりも大きい。

「うふ。さうやが、今度は「のマンションで起るひじ」

「最初の事件もこりだたのこつ」

「MIEは世界中に存在するんだ。同じじうじ起きたって不思議
じゃない」

達也は出かける準備をする。

「とりあえず、「のマンションを調べよ。話の関係から、見晴り
しのこい場所を重點的にね」

「わかったわ」

かくして、事件捜査一日目の開始。

下男1-2（後書き）

これからは一週間に最低一話、載せていきます。

ト馬1-3（前書き）

続きを読む。

今日の天気は曇。

いつもより風が強く吹いており、雲の流れも早い。
幾分か涼しいが天気が不吉を物語っている。

達也はトビラの前に立つ。

「いじだな」

場所は達也たちが泊まつたマンションであり、最初の事件が起きた場所。その十一階。

最初の事件と同じ階の、被害者宅から一番目の部屋。
大体の住人はこのマンションを去つてゐる。この階には、名札を見る限り、あと三人。

そのうちの一室が今夜、血で染まることとなる。
時計を見ると、

「ものすごい反応ね。他の部屋とは段違い」

名札を見る。名前は・・・

播化部。

達也はインターフォンを押す。

無機質な電子音が鳴るが、住民は出でこない。

「留守みたいだな」

当たり前よ、と騎李栖。

「今日は平日。大人なら仕事に行つてゐるわ

達也は少し悩み・・・

「置き手紙でもするか」

「無駄よ。悪戯にしか見えないわ」

騎季栖が案を出す。

「交代で見張りましょう。住人が帰つてくるまで」

ただし、と続ける。

「帰つて来ても、接触はしないこと」

はい！？と達也。

「どうして…？間違いなくこの場所で事件が起ころるー見殺しにする気が…？」

起ころる達也を騎季栖は宥め、

「私はまだ、M.I.Iの存在を信じてはいない。今回でそれを見極めるのよ。事件が起ころれば助けに入るわ。心配しないで。みすみす殺されはしないから」

諭すように言われ、達也の怒りは萎んでいく。

「・・・仕方ないか。ただし、僕が危ないと思つたら直ぐに動くからな

わかつたわと騎季栖。

今日はあまり暑くないのが救いか。

一人で、夜までの見張りが始まった。

深夜一時。

十一階にエレベーターが止まる。

見張りの番は達也。

三部屋のうち、ふたつの安全な部屋に住人が入ったことは確認している。
つまり、

（あれが播化部さん・・・）

齢は二十代後半。女。見た目はかなり、老けて見えた。毎日の仕事、一人暮らしの寂しさなどのストレスが全身から滲み出でている。
長い黒い髪。ピッシリしたスース。

どこにでもいる。

それが今から見たこともないモノに出会うことになるとは・・・。
達也は景色を見ているようにみせ、彼女の視線を誤魔化す。
ガチャつという音と扉が締まる音から、部屋に入つたらしい。
騎季栖に連絡しようとしたが、止めた。

正直、危険すぎる。

いくら騎季栖が強いとはいっても、相手は人智を超えていいる。
自分は不死身だから死なないが、騎季栖はただの人間。なるべく
安全でいてほしい。

自分で処理する。

騎季栖にM.I.I.のことを信じてもらえなくても構わない。
いつのまにか、達也の中で騎季栖の存在が大きくなつていた。
出会つてから、たつた一週間程しか経つていない関係。

しかし、僕らは夫婦であり、自分は騎李栖のことが好きになつて
いる。

騎李栖の傷。

あんなものを、これ以上増やすわけにはいかない。

「・・・よし」

達也は播化部の家で聞き耳をたてようとした時、
ドン
といふ物音。

「まさか！」

達也はドアを開けようとしたが、鍵が掛かっている。

（仕方がない！）

達也はあつさつとドアノブを引っこ抜き、部屋へと入つていった。

・

播化部の部屋には何もない。

間取りは全部屋共通で、リビングにはベッドとテレビ、冷蔵庫の
み。

自分でも色気がなさすぎるとわかっているのだが、仕事が忙し
く、寝て起きるだけの部屋に金をかけようとは思わない。

リビングに着き、カバンを放り投げる。

播化部は落ち込んでいた。

つまらない仕事を必死になしてきたのにもかかわらず、友達は
約束を破つた。

（「めーん、仕事が終わらなくつてさあ。今日は無理みたい）

今日は一人で私の家でお酒を飲む予定だった。

突然の裏切り。

それ程大それたものではないが、彼女はこの日を楽しみにして、今日までの仕事を頑張ってきた。

それがおしゃかになつたのだから、落ち込むのもわかる。

「いいもん。今日は一人で飲むから」

不貞腐れたように一人ゴチ、冷蔵庫を開け、ビールを取り出す。いつものように、窓から景色を見ながら酒を煽る。

「く――――やつぱり「れがないとね!」

そんなことを言いながら窓に手をやる。だが、

「あれ・・・見えない」

外が見えない。

いつもなら見慣れた景色が見えるのだが、部屋の明かりが強いせいか、自分の顔や部屋しかうつらない。

おかしい。

それでも目を凝らせば少しは外が見えるはずなのに・・・全然見えない。

有り得ないとわかつた瞬間に体に力が入る。そして

ズリ・・・

引きする音。

思考が止まる。

肉体的動きも停止。

ニュース。

ここ最近、この島で猟奇殺人が起きてているという内容。

(まさか……)

ズリ・・・ズリ・・・

確かに聞こえる音。

部屋にはそんな音を出すものはない。
つまりは異常。

振り返る勇気はなかつた。

振り返ると取り返しのつかないことになるような気がして。
だが、鏡や窓を間接的に使えば大丈夫な気がした。

(窓をみれば、振り返らなくても様子がわかるんじや)

何者かに体を動かしたのをバレないようこじりつくりと、音のする
ほうを見るように体を曲げた。そこには、

人の形をした何か。

まず手。指先から肘までびっしりと爪が生えている。かすかに手
のひらも見えたがそこも同様に爪が生えている。
それだけでもう人間の枠から外れている。

右手には農具の鎌のようなものが握られている。頭はまるで何か
にしつこく殴られたようにデコボコ。髪の毛は数えるほどしか生え
ていない。

顔が見えた。顔の半分が口。残りの半分は一つの皿で埋まっている。その異形がおもむろに口を開けた。口の中にはぎつじつと歯が生えている。

口の中のいたるところに歯が生えているのだ。内ほほや歯茎、舌にまでびつしりと。

体つきは四十代の男。男かどうか怪しいが第一印象が男だと感じた。

足にはとこりこりから赤ん坊の手のようなものが生えている。素つ裸だが、性器はない。

「…………！」

気持ち悪いとは思わない。これは、夢。嫌悪感を起こさせる要素がいくつも重なりあってできた怪物。存在するわけがない。だが、それでも感じてしまうリアル。こんな状況でも仕事疲れを感じる体。今まで何回も経験した疲労が、それを現実と痛感させる。

ズリ・・・ズリ

振り返つてみる。

立ち上がるナニカ。

濁つた目は、彼女を凝視している。

一切の眼球運動はない。

呼吸が浅くなり、空気の存在を感じられない。まるで宇宙。

暗闇と息苦しさ、得体のしれない恐怖は、よく似ている。

もし、宇宙の美を担当するなら、あの怪物なのだろう。

およそ、人の考えの範疇を超える存在感。

それは不気味な美しさ。

だが、決して受け入れられるようなものではない。

それがカクカクと小刻みに揺れながら、播化部に近づく。

「い・・・いや

一度見てしまうと、中々目線を離せない。

そのせいで少しずつ、後ろに下がることしかできない。

緊張と焦りが播化部を追い込んでいく。

見た位置が悪かった。すぐ後ろにはベランダへと続く大きな窓。

遂には、背中が窓に付く。

追い込まれた。

「う・・・うう・・・

逃げ場がない。

バケモノは急ぐこともせず、ゆっくりと近づいていく。

まるで、笑つてゐるよう見える。獲物を追い込んだ狩人の様。追い込まれた獲物は、ただただ、その命が奪われるのを待つだけ。

「

声にならない叫びを上げる。

腰から力が抜け、その場に座り落ちる。

思いのほか、大きな音が起きた。

しかし、誰も助けにはこない。

周りの住民はあの事件依頼、殆どが引越した。

もし、大きな音をたてたとしても、それが命の危機だとは思うまい。

逃げる手段が他にあるとするなら、ベランダ。

い。

だがここは十階。

飛び降りれば、確実に死に至る。

バケモノに殺されるか、自分から飛び降りるかの一択。どちらも救いはない。

いや、救いはある。この地獄からの脱出という意味では、播化部は諦めた。生きることを。

思えば、大した人生ではなかつた。普通に学校を卒業し、普通に就職。毎日の忙しさにかまけて、他のことは何もできなかつた。

恋人もおらず、趣味もない。

本当につまらない人生。

だけど、それら全てが、今の私を構築するのには欠かせないもの。全てが否定できるものではない。

「さよなら・・・私」

今までの人生は私そのもの。

死は、私との別れ。

目と鼻の先にはバケモノ。

それは、しゃがみこみ、播化部の顔をジロジロと見る。

何かを納得したかのように立ち上がり、右手の鎌を振り上げる。

バカン!!

轟音。

場所は玄関。

ビック

と跳ねる播化部。

バケモノも止まっている。まるで、こいつもビックリしたかのように音がしたほうを見ている。

播化部も恐る恐る、玄関を見てみる。
そこから走つてくる音。

(今度は何！？なんなの！？)

もうパニックだ。耐えられない。
次から次と起る異常。

常人なら既に意識を切つている。

ならなぜ、播化部はまだ意識を保つているのか。

覚悟の違い。

播化部は一度、人生を諦めた。完全に諦めた。落ち着きすらである
ほどに。

その少しの余裕が未だに意識をつなぎ止めている訳だ。
だがそろそろ限界。

急いでいる足音はもう、すぐそこまで近づいている。

助けだとは思えない。

ありえない。そんな都合のいいものは来ないのはよく知っている。
だけど・・・期待はしてしまつ。

・・・だれか、

「助けて・・・」

近くにいないと聞こえないほどの小さく咳き。
それを拾うのは、

「ああ。任せろ」

異常を感じてやつてきた達也。

彼は、走るそのままのスピードで、バケモノの顔をぶん殴った。

下男13（後書き）

これからも頑張ります。

骨が碎ける感じが手に伝わってきた。

バケモノは吹っ飛び、壁に激突。頭から埋まつた。

「・・・」

絶句する播化部。

バケモノが以上に吹っ飛んでいったのに対してではない。

(本当に・・・助けが来た)

それに気がかる。

もうダメだと理解した。もう無理だとわかった。もう終わつたと絶望した。

それが一人の一撃で反転。

心から生きたい！と強く鼓動する気持ちが溢れて止まらない。ぱたぱたと手に落ちる何か。

涙。

怖い思いをしても出ることのなかつた涙。それが、安堵によって決壊するように溢れる。

体は先程よりも震え出し、意識も遠のく。

ここにきて、やつと播化部は安らぎを得ることができたのだ。

「大丈夫？ 怪我はない？」

達也は相手の肩に手を置いて呼びかける。だが、どうやら氣絶しているらしい。

バケモノのほうを見る。もがいてはいるが、中々抜けないらしい。

だが、達也は気を抜かない。相手は人間ではない。何が起こるかわからない。

ガレキから自由になつたバケモノは直ぐに立ち上がり達也に向かつてくる。

距離は約七メートル程。

化け物は一秒で近づき、鎌を振るう。

それを相手の手を抑える形で受け止めるが、

「があ・・・！」

呻く。

相手の手は爪で覆われている。受け止めれば当然、爪が突き刺さる。

まるで、ウロコが盛り上がつたような手。

化け物は、空いている左手を達也に振るう。

痛みで反応が遅れた達也は顔にモロにモロに当つ。

吹き飛ぶ。

「ごあああ！」

打たれた右頬はズタズタになつていて、そこには二つ、三つ程爪が刺さつたまま残つていて。

だが、不死身の達也は、約三秒で回復する。

勢い良く起き上がり、バケモノに組み付く。

するとそいつの足に生えている手が、達也の足を掴み、肉をねじ切る。

「ああああああああ！」

不死身でも痛みは感じる。

組み付いている間、肉をちぎることを繰り返す。

達也はバケモノを重量挙げのように持ち上げ、そのまま壁に思いつきり投げ飛ばす。

壮絶な破壊音。

バケモノは壁をぶち破り、隣の部屋に到達する。

「今のうちだな」

達也は播化部を肩に担ぎ、ここを離れることを選択する。だが、

「…………」

咆哮。

人の背筋を凍らせるような声が、窓を震わせる。

達也は無意識に体が止まり、声のする方を見る。

既に穴から抜け出したバケモノが、達也に向かつて歩いている。よく見てしまうと、どう頑張つても人間には見えない。

気持ち悪すぎる。

達也も体が動かなくなりそうになるが、そこは騎李栖との特訓の成果。無理やりに体を動かす。

向かうのは外。玄関。

戦うことはしない。もちろん播化部のことを考えてのことでもあるが、一番は倒せないと分かっていること。

さつきの一撃で確実に顎は碎いた。その感触が今までの右手に残っている。

なのに、あいつは顎に何らかのダメージが見られない。再生したのか、元々骨がないのか。

どちらにしても勝てる気がしない。達也は逃亡を開始する。

人、一人だけで逃げられるかと言われたら、普通は無理だ。だが、

達也はそれほど苦には思っていない。

達也是不死身だ。

その体が例外と寿命以外では尽きない。その特性があるおかげで、ひとつ脳のリミッターが解除されている。

普段人は全力の三十パーセントしか引き出せない。なぜなら、それ以上の力を出すと、体が壊れるからだ。

人は全力を出すことができたら、拳で岩を割る。しかし、それをすると当然、拳は使い物にならなくなる。

ここで不死身の特性が生かされる。痛めてもすぐに治る達也には、そもそもそのリミッターがないのだ。

なので人を担いでも、達也のスピードは変わらない。

玄関に向けて走る。

そんなに広い部屋ではないので、一秒ほどで玄関に到着。ドアは達也が壊してしまったので、塞ぐことができない。部屋の中には、こちらに向かってくるバケモノ。

(どこまで追いかけてくるんだ！？)

都市伝説では、被害者はみんな部屋の中だ。話し通りの存在なら、外までは出てこないはず。

だが、油断は禁物だ。

達也是播化部を、自分の部屋の騎李栖に預けてこようと考え、移動しようとしたとき、

「おもしろそうなことしているわね達也」

横から何かが横切り、言葉を置いていく。
間違いない。

「騎李栖！？やめる、行くな！相手は人間じゃないんだぞ！…」

騎李栖は無視する。

そもそも彼女はそれを確かめにきたのだ。

玄関に入り、目の前にいるナニカを見る。おおよそ、人間には見えない。だが、そういう特殊メイクの可能性もある。

相手の恐怖心を刺激し、動きを鈍ぐすることが目的のメイクだ。

「正当防衛なら、ある程度は許されるわよね？」

騎李栖は太ももから女性用の拳銃を取り出す。それを迷わず発砲。銃声は五発。

それは、バケモノに吸い込まれるように命中。バケモノは撃たれる度に体がはねた。が、それだけ。血もでない。

（特殊な防護服かしら？）

騎李栖は拳銃をしまい、反対の足から軍用ナイフを取り出す。

「直接・・・確かめるー！」

騎李栖は走る。

距離は約三メートルだが、相手に反撃のスキを『えてはいけない。常にトップスピードで動くこと。それが騎李栖の格闘術だ。バケモノもただ、やられるわけではない。騎李栖に向かって鎌を上から下へ振り下ろす。

それを騎李栖は体を引くことなく、さりげなくに入り込み、鎌を持つ手を受け止める。

爪が刺さり、手から血が吹き出るが、騎李栖は気にしない。

勢いを殺さず、騎李栖はナイフを相手の心臓に突き刺す。もはや、正当防衛の範疇を越えているが、命のかかつた戦闘では、そんな悠長なことは言つてられない。

根元まで差し込む騎李栖。

しかし、血はでない。

そして、バケモノも痛がつていい。動きも鈍らない。

今も鎌を受け止めている手は相手の力に押されて、限界が近い。

(押し負ける!?)

バケモノは、まだ空いている左手を振り上げる。
逃げ場がない。

バケモノの手は、爪がぎつしりと生えている。打撲だけではすまない。受け流すのも困難だ。

騎李栖は、女の子だ。大の大人ほどの体格がある相手の拳を受け止めるほどの筋力はない。

「！……！」

覚悟を決めたとき、

「！」のおおおおお！

達也がジャンプして飛び込んできた。
その勢いのまま、目を殴り飛ばす。
いわゆる、スーパーマンパンチだ。
潰れる感触。

バケモノは吹っ飛んだ。

一、三回バウンドして壁にぶつかる。

騎李栖は上がった息をしながら、例を言つ。

「ありがとう。始めて助けてもうつたわ」

その騎李栖に達也は怒鳴る。

「なんでやめなかつた！下手すれば、死んでたんだぞ！…」

達也も愚があがる。もし、自分が助けにいかなかつたら、騎李栖は今頃・・・。そう思つと涙が出そつになる。

「もう怒らないで。今はこんなことをしている時間ではないわ。一刻も早く、ここから離れましょ」

言われて達也もはつとする。確かに、今は言ひ合つてゐる時間ではない。

「・・・わかつた。急いでここから逃げよつ

外に戻り、播化部を背負つ達也。

騎李栖はバケモノの見張りをしている。

「やつぱり・・・ダメージはないみたいね」

バケモノはなおも、立ち上がりにこちらに向かつてゐる。達也たちは逃げる。向かつのはエレベーターだ。

下男14（後書き）

エンディングまで・・・後少し。

幸い、相手の動きは遅い。このマンションを抜け出せば、とりあえず一息付ける。そう思っていた。

だが・・・

「おかしいわね。あいつの動きが速くなっているわ

まるで地面を滑るようにバケモノは近づいてくる。その速さは早歩きほどだが、じつは、エレベーターを待っている時間はなされうだ。

達也は顔をしかめ、

「やっぱり、外でも存在出来るんだ」

「デタラメなもんだと達也は毒づく。

「横の階段を使いましょう。そのほうが早いわ

騎士栖の案に頷き、エレベーター横の非常階段を降りる。
後ろを見るとやはり、いっしに向かって来てくる。
達也は叫ぶ。

「後ろを見るな！追いつかれるぞ！」

相手の行動範囲がマンションだけだという淡い期待を抱き、達也たちは階段を全速力で降りる。

時々聞こえる、ジャリッという音が背筋を凍らせる。

五分ほどで階段を降り、マンションを抜け出す。それでも走る速

さを変えない。ある程度離ないと安心出来ないのだ。

マンションから三十メートルほど離れた場所で、達也たちはバケモノの様子を見るため、止まる。

外は少し、肌寒い。

道を照らす街灯がなぜか、今回はありがたみを感じない。

どんなものでも不気味に[写る色]は、それだけで精神を削る。

「ここまでくれば・・・平氣か・・・」

息が上がっている達也。いくら力が常人を超えていても、体力は一般人と同じ。疲れがピークに近い。

騎季栖も息を切らしている。あまり、見ない光景だ。

「ええ・・・噂通りなら、出てくるわけがないわ。まあ、部屋から出てきたけれど」

そこが問題。

МИИが都市伝説の噂を形にしているなら、部屋から出るのはおかしい。事件は全て部屋のなかで起こっているのだから。

背中に乗つっている播化部はまだ起きない。よほど恐かったのだろう。

騎季栖は達也に向き、

「なぜ、私を呼ばなかつたの? 何かあつたら連絡する話しだつたでしょ」

う・・・と黙る達也。

連絡しなかつた理由が、騎季栖を危険な目に合わせたくなかったから・・・などと言つたら、何をされるかわからない。

ここは、誤魔化す。

「こJの人Jが部屋に入つて直ぐに、大きな音がしたんだよ。連絡する暇がなかつたんだ」

ふーんと疑つた顔をする騎李栖。・・・嘘ではないよ?
気を取り直し、騎李栖は疑問を口にする。

「こJちらの攻撃は一切効かなかつた・・・。だとすると対抗手段が全然ない」

少し考え、騎李栖は案を出す。

「ねえ、MIIを取り除くことと、どうにかできないかしら?」

案に達也は首を振る。

「それは無理だよ騎李栖。MIIは空氣中に無数にあるんだ。空氣があればMIIもあると思つていい」

沈黙する一人。そこで物音。

ドキッとする一人。マンションの入口を見ると・・・

バケモノがこJちらに向かつて来ている。

「――――!」

とつさに走る一人。もはや、安全な場所などない。あのバケモノをどうにかしないことには。

どれだけ走つても、誰もいない。時間が時間なだけ、当たり前なのだが。

走りながら達也は考える。逆転できる方法を。

（クソツ…まさか、マンションからも出てこれるなんて…どうすればいい…？誰か教えてくれ…・・・…？）

達也はハツとする。

「あるぞーまだ手段がある！」

騎季栖は驚いた顔で達也を見る。

「なに？早く言いなさいーーーのままだとやらねるわー！」

急かす騎季栖。

達也はポケットから携帯を取つてほじりと言いつ、騎季栖が携帯を取り出す。

「それで僕の父さんに連絡してくれ！」

達也の父に？

疑問が頭を埋めるが、今は事態が事態だ。携帯のアドレスから、達也の父の名前を見つけ、コールする。

無機質な電子音が聞こえる傍ら、走つているの一一向に距離が開かないバケモノの引きする鎌の音が聞こえる。

・・・中々でない。そして留守番電話に繋がる。

「何回も電話してくれ！たたき起しすんだ！」

騎季栖はもう一度、コールする。

今度は直ぐに出た。

けだるい感じの声が耳に入ってくる。

『はーい・・・・どうりでこ・・・?』

騎季栖は答える。

「騎季栖です。夜分遅くすみません。ちょっとお聞きしたい」とがあるのですが・・・」

すると直ぐにシャキッとした声に変わる。

『おおー。騎季栖ちゃんー。んばんはー。んな時間にどうしたんだい?』

達也に田配せする。

「今起いつてこむ」と話をしてくれ

領き、騎季栖は現状の説明をする。
気づけば横には大きな防波堤が見える。潮風のベタベタした感じ
がさらに体力を奪う。

なるほど・・・と時記流。

『確かにそれは無理だ。M.I.Eで出現したモノはM.I.Eでないと倒せない』

続けて言つ。

『それに、バケモノが外に出てくるのは当たり前だ』

「なぜです？」

『君たちの知つてゐる話しさは、事が部屋で終わつてゐることが多いが、本当に起つた話しさはそれじやない』

騎李栖は疑問を抱える。

「・・・本当に起つたこと?」

うんつと時記流。

『都市伝説は本物の話が混ざつてゐる。MIIはその本物のほうを参考にしたんだろう』

「でも・・・私たちは聞き込みで、その話をする人はいなかつたのですけれど?」

『まあ、その話しさは後で。今は君たちが助かる方法を教えるよ』

そうだつた。ついつい知識を求めてしまつ。騎李栖も頭を切り替え、静かに聞く。

いいかい?と時記流。

『さつきも言つたけど、MIIはMIIでないと対処出来ない。だから【真実の都市伝説】に入つてゐる警察を探すんだ』

・・・警察?

『今回の都市伝説の本物の終わり方は、警察に犯人が捕まつて終わつてゐる。だからその島のどこかに【MIIで出来た警察】がいる

はすだ』

「それを探してあいつにごぶつければいいんですね」

『そう。探すには達也に預けた時計が役に立つはすだ。だから、絶対にそいつと戦おうとはせず、その警察を探すんだ。いいね?』

わかりましたと黙つて、電話を切る。

「なんて言つてた?」

達也の問いかに騎李栖は携帯をしまいながら答える。

「MICEで出来た警察を探すこと。それでどうにかなるみたい」

よしつと達也は言つて、

「騎李栖、時計とこの人を連れて、その警察を探してきてくれ。僕がこいつをここに釘付けにする」

バケモノはすぐそこにいる。

達也は立ち止まり、時計と播化部を騎李栖に託す。そして、バケモノのほうを向く。

電灯の下を通つている姿は、まさにホラー。

怖いという感情が頭を占拠する。

死にはしない。死ねない。だからこそ、怖い。

死ねばそこで終わるが、死ねない体は、死ぬほどの中じみを永遠に味わい続ける。

だが、騎李栖にこいつの相手はさせられない。

惚れた相手だ。それを守るのは男の役目。それに・・・

(まだ、夫婦らしい」と、一切してないしな)

死なれては困る理由を無理に下品なほうに考え、自分の心をいつもの形に戻す。

思えば、ここまで人を好きになつたことはない。今までの人生。避けられること多かつた。

友達になり、その人を好きになつて、そしていい感じになつて、避けられる。

今まで仲良くしていた友人が、いきなり話してくれなくなる苦しみは、到底想像できるものではない。

だが、騎李栖は違つた。

興味の持ちかたはアレだつたが。

嬉しかつた。そして、避けることもしなかつた。むしろ、ドンとぶつかつてきた。

こんなに嬉しいことはない。

それに、形だけではあるが、夫婦にまでなつた。そんな相手を

(傷つけさせる訳にはいかない!)

バケモノは、鎌を引きずりながら距離を縮める。距離は約十メートル。全速力で動いて約二秒程。身構え、バケモノへと走り出す達也。

しかし、

「ちょっと待ちなさい達也」

そういうて足払い。

地面上に受身もとれず、激突する。

「ほおあー・・・何すんだ騎李栖ー。」

吠える達也。だが騎李栖は冷静に答える。

「囮役は私が引き受けたわ。達也。あなたが探すのよ」

敵はあと五メートルで射程範囲。あつちはいつものカクカクした動きになつているため、動きは遅い。
達也は驚愕する。

「・・・・ふ、ふざけるな！あんたじや危ないー！」

なおも吠える。

「僕は不死身だ。何があつても死はない。騎李栖、あんたは違う。
致命傷を負えば、死んでしまうんだぞー！」

達也の怒鳴り声は騎李栖の表情を動かすまでには届かない。だから続けて叫ぶ。
何度も。

「僕が囮になる。いいか、冷静に考えててくれ。俺が一番この役に最適だ。今までだつてそうしてきただろ？」

騎李栖は動かない。

それに苛立つた達也は騎李栖に掴みかかる。

「おいなんとか言え

「黙りなさいーーー。」

騎季栖の声に達也は言葉を遮られる。

「な・・・！」

騎季栖は達也の方を向かず、言葉を紡ぐ。

「私では、人を担いで走ることは出来ないわ。それに、M.I.I.については、あなたの方が詳しい。私が困になつたほうがいいわ」

でも！と食い下がる達也。しかし

「あなた・・・自分もバケモノみたいな言い方をしてたわね」

・・・何？

「私は別にあなたがバケモノみたいだから、あなたと一緒にいたわけではないわ。あなたはあなた。あんな・・・生物かもわからないものとは違う」

だから・・・

「自分をバケモノみたいに言わないで」

「一！」

達也は固まる。

体が答える。もう・・・騎季栖には一切逆らえないということを。

「・・・」

言われたことがない言葉。そして、

誰かに言つてほしかつた言葉・

達也は播化部を背負い、時計を手に持つ。

そして一言。

「・・・必ず、生きていてくれ」

騎季栖は笑顔で答える。

「 もちろんよ、達也」

達也は走りだした。振り向かず前を向いて。
騎季栖の為に。彼女の為に。

下男15（後書き）

ラストスパート！

(・・・行つたわね)

達也が走り出したことを確認した瞬間、騎李栖は発砲する。残りの弾はあと三十発。

無駄にはしない。

相手の進行を止めるため、足を重点的に打ち抜く。バケモノは騎李栖の目の前に倒れる。

もぞもぞして直ぐに立ち上garることは出来ないようだ。いつもなら、ここで止めを刺すのだが、バケモノは死なない。

(動きを封じるほつに、考えを置き換えて動くべきね)

騎李栖は距離をとる。

接近戦は相手に有利。

ならこちらは、手持ちの手榴弾三個。残りの弾二十発の銃。これで時間を稼ぎ、最後は軍用ナイフで迎え撃つ。回復し、立ち上がる敵。

敵が立ち上がるまで約三十秒。

騎李栖は同じ動作を繰り返す。

同じ行動を二回、繰り返し、遂に弾が切れた。

騎李栖は銃を捨て、手榴弾を投げる。

バケモノの近くに転がったのを確認し、近くの植木に隠れる。爆発音。

煙の中でもがいでいる敵。

だが、全身を万遍無く攻撃する手榴弾では、バケモノの動きを止めるのにはあまり、向かないようだ。それでも、騎李栖は続ける。

・・・・・

・・・

達也が走り出してから十分。

手榴弾も死き、軍用ナイフ一本の騎李柄。

体はいたるところに切り傷や打撲の痕。服はボロボロだ。スカートから見える足からは血が伝っている。

(そろそろ・・・危ないわね)

息をあげる騎李柄。

敵が自分を的にしていると思い、とっさに達也と反対方向に走つたが、こちらには見向きもしなかつた。

(じゅりゅう、あいつのターゲットはあの女のひとみたいね)

頭から血が垂れ、片目を塞ぐ。

これ以上、足止めできそうにもない。一度、体制を整える為に、退避したいのだが・・・

(そんなことをしたら、達也の方へ行つてしまつ)

それだけは避けなければならぬ。

バケモノに傷はない。

弱つてもいい。

「本当に・・・デタラメね」

騎季栖は走る。

狙うはやはり足。

ナイフで切りつけ、膝を付けさせる。そして頭に一撃を加え、相手の動きを止める。

これが今一番の時間稼ぎ。

だが、毎回うまくはいかない。

騎季栖が足を狙つてナイフを横薙ぎに振るう。それをバケモノの足に生えている手が受け止める。

「！！」

手は切られても離さず、近くの手も動員され、完全にナイフの動きを止められた。

その隙に、化け物は騎季栖の右足を掴み、持ち上げる。

「クツ！」

逆さまになつた状態で捕まる騎季栖。

動けない。

手からナイフが離れ、対抗手段がなくなる。

「負けない・・・」の…

拳をバケモノの腹に叩き込む。だが、意にも返さない敵。

そして、バケモノは右手の鎌を振り上げ、

騎季栖の右足を切り落とした。

「！……！」

絶叫。

地面に落ちる騎李栖。

切られた右足からは、おびただしい血。

激痛で視界が歪む。思考も定まらない。

足を切り取ったバケモノは足をジロジロ見たあと、それを食べだした。

血そうに食べるバケモノを見ても、騎李栖は怯まない。

これまでの騎李栖の経験が、まだ、力を与える。

だが、片足を奪われたのは痛い。立ち上がるのにも相当の時間がかかる。

それでも、いつまでも寝ているわけにはいかない。

騎李栖は立ち上がるうとする。

だが、相手はそれを待つてはくれない。

足が美味しかったのか、又は別の理由なのか。バケモノは騎李栖に興味をもつたらしい。

動けない騎李栖を無視し、達也を追いかけることもせず、騎李栖に近寄る。

これは好都合なことだが、いかんせん、状況が悪すぎる。やつと座ることができたが、そこまで。

爪だけの手は、右の細腕を掴む。

(――)

爪が容赦なく、腕に突き刺さる。

痛みはあるが、足の激痛に比べればどうといつことはない。

なんとか振り解こうとしたが、血が足りない。頭が振れ、力が入らない。

成す術もないまま、右腕を食いちぎられる。

「

」

声にならない声が、闇に吸い込まれる。
まるで楽しそうに、バケモノは叫びを聞いている。
歯を食いしばり、なんとか意識を保つ。

（今・・・氣を失つわけにはいかない！）

意志の強い瞳をバケモノに向ける。
相手は口をぐるぐると腕を食つている。

ドクドクと流れる血。

荒い呼吸が、さらに出血を酷くしている氣がして、知らず知らずのうちに、呼吸が浅くなる。

もはや動けない。

（「」の状態で私に出来る」とは・・・）

そつと、騎李栖は左腕を差し出す。
そう、食事を差し出し、時間を稼ぐことにしたのだ。
あまりにも無謀。

騎李栖は生還することを諦め、使命を真ひ貫かることを重視する。

「もう・・・これしかない」

約束は守れないな・・・

「だけビ・・・死んでもここへは行かせない！」

（達也・・・）

死は目の前。

頭は、もう働かない。
もう、田は見えない。
もう、生きられない。
田から涙が出た。

白く濁ってきた頭の中は、達也との思い出ばかりが流れる。

(思えば・・・あの頃が一番楽しかったな・・・)

騎李栖も、いい人生だったと言える程、楽なものではなかつた。
だが、達也と一緒にいる間は、心から乐しかつた。
夫婦にもなつた。

そんなことを考えている間も騎李栖は食われている。もう・・・
左手はない。

(結婚指輪は・・・はめられないわね)

夫婦になつたはいいが、一回もそれらしいことはしてなかつたな。

(せめて・・・キスぐらいは・・・してあげればよかつたわね)

涙が止まらない。

痛みではなく、後悔でもなく、ただ・・・

会いたいだけ。

最後の足も取られ、体の感覚はなくなつた。
最後に口にするのは、騎李栖の最後の願い。

「・・・死にたくないよ・・・」

続く。

セミファイナル

達也は走る。

汗が吹き出し、服を体に張り付かせる。

その不快感も気にせず、走る。

息はきれ、足はガクガクだ。

だが、走る。

止まれない。止まることができない。

止まってしまったほうが、死んでしまいうそだ。

「クソッ…どこにいるんだ！」

時計の反応を頼りに、達也はマンションの街並みを駆ける。
あれから五分。

騎李栖のことが、頭から離れず、集中できない。
だが、探すことはやめない。

時計は回転を速めたり、遅くなったりと不規則だ。

播化部をどこかに置いていこうとも考えたが、もし・・・万が一・
・・のことがあれば、騎李栖に申し訳がたたない。

（怒られたくないもんな。怖いし・・・）

焦りが思考を鈍らせる。

体は前に、前にと急かすが、足が付いてこない。
途中、何回もコケた。

だが、走る。

これが、騎李栖を助ける方法だから。
目の前には、さつきから同じ光景が続いている。
等間隔の街灯。同じ形のマンション。同じ植木。真新しさを何も

感じない。

だからわかる。

異常。

「…………」

見つけた。

微かに揺れる体。

見たことのある制服。その色。

だれが見ても警察。

時計を見る。

針は、とてもない速度で回っている。

これだ。こいつだ。

達也はその警官まで、全力でダッシュする。

顔はない。

だが、これがいる意味は理解している。

「おい、僕と一緒に来てくれ！」

警官はびくともしない。

達也はなおも叫ぶ。

既に喉はカラカラ。血の味も口に広がっている。

だが、叫ぶ。

「来てくれよ！頼むから！あんたじやないと……あいつを倒せないんだよ……」

警官は反応しない。

達也は涙が出てきた。

だが、そんなお構いなく、涙声で叫ぶ。

「早くー。じゃないと・・・騎李栖が・・・」

何に反応したのかはわからない。
だが、確かに、警察はこひすに顔を向けた。

「ー。」

そして、言つた。

【どうされました?】

男と女の声が混ざり、Hマークが掛かっているような声。
それが、今はとても力強く感じる。

達也は本当の都市伝説を思い出し、言つ。

「不審者が、います。助けて・・・ぐだわー」

それを言つと、警察のマークは、走り出した。
それは一般の人人が走るほどのスピード。
だが、確実に騎李栖の方へ向かっている。

「待つていろ・・・騎李栖」

達也は播磨部を近くのマンションの玄関ソファーに寝かせ、騎李
栖のところへ走つた。

・

咀嚼の音が暗闇に聞こえる。

普通なら、それだけでここには来ない。

だが、達也にとつては、それは絶対に行かなければならない場所。

(何を・・・食つていやがる)

全速力で走つてきた達也は、どうやら警察よりも早く、着いたらしい。

あのM.I.Iが違つところにこつたとは、考えにくい。

そして・・・見た。

何かを。

わからない。

あれは・・・誰だ。

道路上に転がつてゐるあれは・・・なんだ?

既に、人間だつたときの面影は、皆無だつた。

だつて・・・

「何も・・・ない・・・」

騎季栖だつた物が、何もない。

達也に見えるのは、

両手両足がなく、胸も食われ、顔も抉られてゐる赤い髪の死体。

気づいたら走つていた。

どこにこんな力があつたのか。

これまで、一番速い。

周りが全て、引き伸ばしたように見える。

バケモノは騎季栖に向かつて、腰を振つてゐる。

達也は石の硬さにまで拳を握り締め、頭を殴り飛ばす。

今まで聞いたことのない音が響く。

バケモノは十メートル程ノーバウンドで飛ぶ。

達也の拳もめちゃくちゃになっていたが、気にしない。

騎李栖の元へ歩く。

そして・・・

「今来たよ・・・騎李栖」

そつと話しかける。

後ろにいるバケモノは既に起き上がり、こちらに向かつて来ている。

それは、これまで一番速いスピードで。
だが、達也は後ろを向かない。
もう・・・意味がない。

「約束を破るなんて珍しいじゃないか。いつもは、僕が・・・やぶ・
・て・・・怒られてたのに・・・」「

世界が滲む。

頭の中がいろんなことでいっぱいになり、言葉が見つからない。
今だ、強がつていれる自分がすごい」と感じる。

「なあ・・・ぼ・・・俺さ」

聞きたいことがあった。

「お前の旦那になれるほど甲斐性・・・あつたかな」

バケモノはもつすぐ後ろ。

だが、そんなことに時間を使いたくない。
そちらには向かない。

「まひ、強くなつたじやないか。騎季栖のおかげだよ」

まだまだ言いたい。

「俺・・・お前のこと・・・好きだよ」

言葉は届かず、泡となつて散る。

バケモノは鎌を振り上げる。

そう、達也の首を跳ねる為に。

だが、そうはならず。

パン、という乾いた音がして、バケモノは後ろに倒れた。

向かいには警察官。

達也は騎季栖を見る。

周りには、もう興味がない。

涙が止まらない。

出会つてから、あまりにも短い時間。

だが、騎季栖が側にいることに慣れすぎた。

心に大きな伽藍堂。

達也は強く、強く、騎季栖を抱きしめた。

役目を果たし、警官は無数の四角いキューブに分かれ、虚空に消えていった。

バケモノも同様。

四角いキューブとなり、消える。

全て・・・消えた。

そう・・・騎季栖も。

達也の腕の中で、騎季栖も無数のキューブへと変化した。

「・・・俺を、怖がらないでくれて・・・ありがとう。そして、またな」

理由も、疑問も、もう湧かない。
騎李栖はそのまま、空へと昇り、霧散した。

セミファイナル（後書き）

次が最後です。

その後。

夏休み最終日。

空は生憎の空模様。

厚い雲が多い、どこか遠いところで雷がなっている。

達也はベッドアイランドにいる。

その後、達也は歩いて帰った。

帰れたのは昼前。

タクシーで帰ればもっと早く着いたが、心の整理がつくまでは誰とも会いたくなかった。

家で父、時記流に会い、今回のことについての説明。

時記流は怒ることはせず、ただただ、話を聞いてくれた。

涙は止まらない。

あまりにも大きなものを失った。

それを汲み取ってくれたのだろう。

父は言う。

「MIEについては、まだ、わからないことが多過ぎる。だが、今回のこと、研究は一層、早めなければならない。騎李栖ちゃんのような犠牲者を・・・出さないよう」

「元気よ。

頷く。

達也は決めた。

MIEについて、自分でも出来ることをしようと。

今回、この島に来たのは、その報告だ。

事件のこと。警察は前科で、似た事件を起こした人を逮捕。概ね容疑を認めているらしい。これは、何処からかの手回しか、警察の嘘の報告かはわからない。

まあ、俺には関係ないが。

達也は、騎季栖と一日を共にした部屋に来た。
ここが一番、騎季栖と濃密に過ごした場所だ。
机に花を飾り、言つ。

「これから、俺も親父の研究を手伝つてこしたよ。お前のカタキ
も取りたいし。それに・・・」

意志の強い目で花を見ながら、

「お前だけが、キューブになつて消えた理由を探す為にも」

そこが一番の理由。

他の被害者は、騎季栖のように消えたりはしていない。
なぜ、騎季栖だけが消えたのか。
もしかしたら・・・

「LJの部屋は、LJのまま使えるようにしてもらつ様、親父に頼んど
いたから。だから、なにかあつたひ、LJで待ち合わせしようぜ」

じゃあ・・・またな。
達也は立ち、窓を見る。
そこには、雲の切れ間から太陽の光が差し込んでいた。
パレットの上の色では到底表せれない色。
まるで、天使が降りてきている様だ。

（せいぜい、頑張つてみなさい。どれだけできるか、見ていてあげ
るわ）

そんなことを言われた気がして、苦笑しながら、達也は部屋を後
にした。

その後。（後書き）

これで、「真・都市伝説の不死身さん」終了です。
長々と見ていただいた方、ありがとうございました。
現在、続書きは予定しておりません。

また、他の作品で会えたらと思います。では・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3450w/>

真・都市伝説の不死身さん

2011年11月17日17時46分発行